

会 議 録

会議の名称		令和 6 年度 (2024 年度) 第 5 回つくば市総合教育会議		
開催日時		令和 7 年 (2025 年) 2 月 20 日 (木) 午後 2 時 15 分から午後 4 時 15 分まで		
開催場所		つくば市役所 5 階 庁議室		
事務局 (担当課)		総務部総務課		
出席者	委員	五十嵐市長、森田教育長、柳瀬教育委員、倉田教育委員、和泉教育委員、坂口教育委員		
	事務局	《総務部》 沼尻次長 《総務課》 高野課長、木口課長補佐、稲辺係長、和田主任 《教育局》 吉沼局長、久保田次長、中根統括監、青木企画監 《教育総務課》 飯村課長補佐、武田係長 《学び推進課》 増沢課長補佐、東泉課長補佐、伏谷指導主事、吉田指導主事 《教育相談センター》 小野教育相談センター所長 《総合教育研究所》 岡野所長		
公開・非公開の別		☒ 公開 ☐ 非公開 ☐ 一部公開	傍聴者数	7 名
議題		不登校の対応について		
会議次第		1 開会 2 市長挨拶 3 議題 4 閉会		
その他		傍聴人の発言は、御本人の了承を得た上で掲載しています。		
< 審議内容 > 事務局 (総務課) : 本日はお忙しいところ御出席いただき、誠にありがとうございます				

ございます。ただいまから令和6年度第5回つくば市総合教育会議を開催します。今回は不登校への対応について意見交換を行います。なお、終了時間は午後4時15分を予定しております。会議録の作成にAI議事録を使用しておりますので、御発言の際にはマイクの使用をお願いいたします。それではここからの進行は市長をお願いいたします。

市長： 今日もありがとうございます。今日から坂口さんが委員として参加してくれていますので、教育委員の皆さんは分かると思いますが、他の方はわからないと思うので、一言自己紹介や思いを自由にお話しいただければと思います。

坂口委員： はじめまして、坂口と申します。どうぞよろしくお願いいたします。先日初めての定例会の際に簡単に御挨拶させていただいたことを思い出しながらお話をさせていただきますが、今回お声がけいただいた経緯としても、私自身に小学一年生の息子が一人おります。次二年生になりますので保護者という立場が一年ですが、普段の仕事としましては、「森のようちえんあなたとわたし」という名前で、認可外保育施設の森のようちえんを、地区としては島名地区の中別府という地域で、民有林をお借りして、一年を通して外で過ごすという幼稚園をやっております。夫婦で立ち上げて、丸六年が過ぎたところです。野外活動や子供の自然体験活動、環境教育という仕事を12年くらいになります。ですので、子供のキャンプですとかそういったことを仕事にしてきました。今は普段、森のようちえんを年間通して外でやっており、それ以外に夏休みや冬休みなどの長期休み、あとは、週末に、小学生や一般の幼稚園、保育園に行っている子供たちや中学生向けに外遊びを、サマースクールみたいな形で自然体験活動の場を作っております。思いとしては、元々つくばで育ったのですが、TXができた後、木々がなくなっていくのが寂しくなりまして、身近な森がもっと価値があるものであったらいいなという思いから、あえて荒れて困ってるところはないかなと探して、そ

この地主さんに子供たちの遊び場としてお借りできませんか、いろいろな人が集う場を作りたいです、という思いを伝えて借りています。本当に0歳からお年寄りまでが集まれるような場づくりを目指して、まずは子供が真ん中というところで始めています。ですので0歳の親子や大人向けの体験などを仕事にしています。今回お声掛けいただきまして、公教育というところについてはほとんど仕事としては関わったことがないのですが、直接、公教育ではないところに来ている子供たちの声、保護者の声をたくさん聞いてきた部分がありますので、その経験を生かしながら、何かお役に立てたらいいなというところでやる気に満ちております。どうぞよろしくお願いします。

市長：特に総合教育会議でも話題になってる非認知能力や子供の遊びとかそういうものの知見をいろいろ持っていますし、現場からの声も届けてもらって、一緒に盛り上げていただければと思います。よろしくお願いします。

では今日の議題自体は不登校ということで、ここで皆さんに議論をしていただいていて、そして教育委員会でも不登校に関する議論をかなり積み上げていただき、つくば市では全国的には増加傾向にある不登校が、昨年度何とか減少傾向に入ることできたというのは、かなり重要なことだと思っています。それで問題が解決したとは全く思っていないですが、少なくとも何らかの歯止めがかけられたというのは、皆さんそれぞれの立場で御尽力いただいた一つの成果だと思っています。ただ、もちろん、根源的にどうして行かなければいけないかも含めて考えなければいけないことがたくさんありますので、今日はまず教育局から、おさらいにはなりますが、今やっていることを聞いた上で、今本当に何が必要なのか、これから総合教育会議として、あるいは市として、不登校の中でもこういうところが足りてないのではないかと、そういうことが議論できて、施策につなげることができればと思いますので、よろしくお願いします。ということで、まず学び推進課から話してもらえばよろしいですかね。

小野教育相談センター所長：教育相談センター所長の小野と申します。今日の議題であるつくば市の不登校に関する児童生徒支援のあり方について、学び推進課指導主事、吉田の方から説明させていただきます。資料の内容については、令和6年度の途中段階ですので、数字としては、令和5年度の数字がメインにはなっておりまして、御了承ください。随所で令和6年度の数字も使っております。

学び推進課吉田指導主事：よろしくお願いします。まずつくば市における不登校児童生徒支援について説明いたします。全国では現在に至るまで、不登校児童生徒数は11年連続で増加し、過去最多となっております。出現率は3.7%です。つくば市においても不登校児童生徒の数は令和元年から増加傾向です。令和5年度については809人となっておりますが、全国で不登校児童生徒数が増加している一方で、つくば市の不登校児童生徒数は減少傾向が見られました。年々増加する不登校児童・生徒について対策をすべく、令和4年度に検討会議を組織して支援の在り方について考えました。つくば市では一人ひとりが幸せな人生を送ることを最上位の目標とする教育大綱の下、つくば市の不登校に関する児童生徒支援の在り方を令和5年に策定しました。不登校は問題行動ではないという認識の下、学校に登校することのみを目標にするのではなく、社会的自立に向けた力を育み、一人ひとりが幸せな人生を送ることができるように、児童生徒の視点に立って様々な支援を行っています。目指す学校の在り方として、不登校は全ての児童生徒に関係があるという認識の下、一人ひとりが自分の居場所を実感できる場であること、そして豊かな学校生活を送ることができる場となるよう支援を検討しています。一人ひとりの児童生徒の個性・思いやペースの違いを捉えて柔軟に対応するために、学校内での支援はもちろんのこと、学校外においてもご覧のように支援を行っています。こちらについては後程また説明させていただきます。中学校における相談支援として、学校生活相談員も18名配置しています。学校内での支援の

一つとして校内フリースクールがあります。令和 4 年度長期欠席児童生徒アンケートの結果の不登校児童生徒の主な願いは、「好きな勉強ができる学校」、「ゆっくり休める場所がある学校」、「いつ行ってもいい学校」、保護者の願いは「勉強を教えてくれる場所」、「自由に過ごせる場所」、「のんびりできる場所」という意見がありました。それを受け、学校施設に、通常の教室とは別の児童生徒の居場所を整える必要性を見出し、次のような方針で校内フリースクールを設置しました。画面が見づらければ資料の 7 ページをご覧ください。こちらがつくば市の校内フリースクールの方針です。ルール作りに関しては、各学校にゆだねています。学校ごとに、学校の状況に合わせて、利用する児童生徒も交えながら校内フリースクールのルール作りを行っています。校内フリースクール設置の経緯は 8 ページのとおりです。令和 4 年度に中学校一校に試行的に設置し、令和 5 年度に全ての中学校及び義務教育学校後期課程並びにモデル校として小学校 6 校に設置しました。令和 6 年度にすべての小中学校及び義務教育学校 50 校に設置しています。中学校及び義務教育学校後期課程においては、子供たちの多様な過ごし方に、より柔軟に対応するため、令和 6 年度から 1 部屋増やし、2 部屋体制で進めています。令和 6 年度は支援員及び補助員を、小学校及び中学校には 1 名ずつ、義務教育学校には 2 名ずつ配置しました。こちらが校内フリースクールの様子です。小学校前期課程と後期課程で分けてまとめました。このように、ぬいぐるみが置いてあったり、作成した掲示物が飾ってあったりするなど、温かく安心できる環境を整備しています。また、トランポリンを置いたり、くつろげるスペースを確保するなど、リラックスできる場を設置している学校もあります。中には、一人で落ち着いて過ごせるようにパーティションで区切って一人で過ごせる場を作ったり、テントの中で集中して過ごせる場所を作っている学校もあります。中学校においてもリラックスできる場として個人スペースをご覧のように作っている学校もあります。中学校だけでなく、小学校前期課

程においても畑のように体験活動を取り入れる工夫をしながら子供たちがより柔軟に学校生活を送れるよう工夫しています。出入り口の配置の工夫については、皆の目があるところから入りづらい子に関しては裏口や他の子供たちから見えないところから入っていけるような工夫をしています。掲示物に関しても、校内フリースクールだけでなく、交流する学級との繋がりが持てるように環境を整備しています。また、学校によっては、保護者と共通認識が持てるように、校内フリースクールの段階別支援目標というものを保護者と共有しながら、校内フリースクール、学校、保護者が共通意識を持ちながら子供たちをサポートしていけるように工夫している学校もございます。これらの資料については研修会でも共有しながら先生たちがより良い運営ができるようにしています。

令和 5 年度の校内フリースクール利用者は小学校 76 人、中学校 301 人、計 377 人です。前年度に不登校であった児童生徒も校内フリースクールを利用し居場所としています。具体的な人数としては、令和 4 年度に 30 日以上欠席していた児童生徒数 143 人、令和 4 年度に 150 日以上欠席していた児童生徒数 41 人が令和 5 年度は校内フリースクールを利用しています。今年度も多くの児童生徒が校内フリースクールを利用し居場所としています。保護者の反応として、このような声が寄せられています。「自宅以外で安心して過ごせる場所を見つけてほしい」、「家族以外の大人との会話ができる」など、校内フリースクールがあってよかったという声が寄せられています。こちらが令和 5 年度の校内フリースクールの利用者数です。全中学校・義務教育学校後期課程 18 校、小学校 6 校で実施しており、1 日の平均利用者数は 3.0 人です。こちらが令和 6 年度の利用者数の推移です。今年度も多くの児童生徒が校内フリースクールを利用しています。12 月の時点で 2.99 人、約 3 人の生徒が、1 校当たり 1 日平均で利用しています。その他学校内における支援として、校内フリースクールのみではなく、教員による教育相談を行い、児童生徒が、いつ

でも、誰でも相談できる体制を学校でつくっています。またスクールカウンセラーの人数を増やしたことで、より多くの児童生徒や保護者に、より丁寧に、柔軟に対応できるようにしています。また、中学校においては学校生活相談員も18名配置しています。学校外の支援として、教育相談センターでの電話相談や面談による相談、担任やスクールソーシャルワーカーによる家庭訪問などを行っています。スクールソーシャルワーカーは各中学校区に配置しています。また、公設の不登校児童生徒支援施設、つくしの広場、ここにこの広場での通所支援を行っていますが、令和7年3月31日でここにこの広場については委託期間終了となります。一方、令和7年度からは、新たに大穂交流センターの2階に「ひだまり広場」を開設します。こちらの案内も随時進めているところです。

続きまして、民間の不登校児童生徒支援事業利用に係る保護者への支援として、民間の不登校児童生徒支援事業を利用した際に支払った利用料に対し、1か月当たり最大20,000円を助成しています。また、運営者への補助も行っています。保護者に対して、支援施策に関する積極的な情報提供も行っています。家にいる児童生徒への支援として、市独自のICT教材「インタラクティブスタディ」の活用や茨城県が配信するオンライン授業動画「いばらきオンラインスタディ」の活用を通してオンラインでの学習支援を行っています。令和5年度の不登校児童生徒数809人のうち、学校内外の機関等で専門的な相談指導等を受けていない児童生徒数は117人いましたが、教職員からの継続的な相談・指導等は受けており、全ての不登校児童・生徒が、何らかの相談・指導等に繋がっているとは言えます。今年度の1月時点では、学校内外の機関等で専門的な相談・指導等を受けていない児童生徒は、46人となっており、受けている児童生徒の数は増えています。不登校児童生徒809人中479人がつくば市の施策を利用しています。令和5年度の数字にて説明する部分が多くなってしまいましたが、今年度の実績についても年度終了後にしっかりと分

析していきます。以上です。よろしくお願いします。

市長：まず内容についての質問はありますか。

柳瀬委員：最後の画面ですが、①から⑤の合計実人数と、①から⑤の合計延べ人数があります。⑤としてスクールカウンセラー、教育相談員への相談が288人とありますが、これが①から⑤の足し算になっているわけです。スクールカウンセラーとか教育相談員への相談というのは、まずほとんどの不登校に関わる児童生徒はしているのではないですか。それを全部足した上で479人となっている。①から④までを足す形の方がいいのではないかと思うのですが。

市長：⑤は前提ではないかということですよ。

柳瀬委員：重複しています。

教育相談センター小野所長：⑤については単独の数字として挙げています。

柳瀬委員：そうすると、①から④の合計ということでいいですかね。479人の中に⑤が入っているのですかね。

学び推進課東泉課長補佐：お答えいたします。⑤の数字につきましては、①から④を足した数字というわけではなく、⑤に関しては、不登校児童生徒数809人のうち、288人が、スクールカウンセラーや教育相談員の相談を行ったというのが状況でございます。

市長：繋がっていない表は出せますか。これと次のページの数字はどういうふうに関係していますか。私たちが気になっているのは、この117人をまずどうしますかという問題に対してなかなか手つかずの状態があるわけです。ずっと前から問題になっているように。この117人という数字がどこから生まれてるのかということのをきちんと把握したほうがいいわけです。柳瀬委員が言っているのは、次のページの、これでいうと①から④を足すと今の数字になるのかならないのかということ。

教育相談センター小野所長：今映っているページについては、つくば市の不登

校に関する児童生徒支援施設を利用している子供たちが809人中、479人で、①から⑤のところは重複しているところがありますが、実人数で言うと479人がつくば市の不登校支援の何かしらに繋がっているという状況を示しています。前のページの692人というのは、何らかには繋がっているが、つくば市以外のところも含まれている、もしくはつくば市が今不登校支援の施策で出している施設ではなくて、病院や児相との関連ができている数字です。

市長：なるほど。市のサービス以外の部分もきちんと市としては把握してる人達についてはカウントしている。

教育相談センター小野所長：そうですね。そういう数字になっています。

市長：分かりました。他に何か数字とかについて確認はありますか。大丈夫ですか。そうしましたら、それぞれの方が色々な思いを持って昨今の状況を見ていらっしゃると思いますので、できていることももちろんあればできていないこともたくさんあると思っているのですが、課題感を一人一人共有していただいて、より掘り下げたり質問したり確認したりしながら考えていくような感じにしたいと思います。和泉委員から聞きますかね。

和泉委員：結構たくさんありますがいいですか。

市長：もちろんです。今日簡単に収束する話でもないと思っています。

和泉委員：まずこの時期にこのテーマで本当によかったというか、安心しました。というのも、ちょうど一年前にもアンケート集計をしたものを踏まえながら、指導主事の方々とは見ていたので、定点的に見ていくのはすごく大事ですので、このタイミングがよかったと思っています。前提の話でもう一つしたいのが、実態に即すことはすごく重要だなとこの三年で感じています。毎年、全国の市町村教育委員研究協議会というものがあって、ここ三年間、私は年に一回参加し、他の自治体の取組を聞く中で、二年前は全市的にアンケート調査をしている自治体はなく、加えて、一年間を通じて議論できたという成果で、つくば市は細やかで多様な施策ができているなというのを、全

国の自治体の取組を聞くたびに思いますし、確か他自治体から問合せもあったかと思っています。今後も常に定点観測的なアンケート調査の実態と、振り返りはしっかりやっていきたいと思いながら、資料を今回読んでいました。

何が問題かということのをいろいろ考える中で、私は大きく二つに分けて考えました。一つ目はマイナーチェンジというか、細部、小規模、あるいは少しずつ、もうすでに作ったものに対して、実践していく中での課題が今の発表のスライド資料にありました。もう一つの課題としては、マイナーチェンジではなく、モデルチェンジ、この枠組み自体に踏み込んで、抜本的に考えなければいけないこともあるのではないかと思います。

一つ目のマイナーチェンジの方からいくつか挙げますと、まずすぐできることから考えると、資料の7ページ目、校内フリースクールですね。これは、教員との懇談会でいろいろ実感を先生方からいただいた中で、やりながら状況がわかってきました。だけれども、運営と手続の明確化は全市的にしてもらった方がやりやすいという声が幾つか聞かれたのがすごく気になっています。もちろん、先ほどの説明であったように、校内フリースクールのルール作りは、各学校にゆだねている、やはり地域性もありますし、平均値でしか出てないので分からないのですが、ある学校は待機児童がいて、待ってもらわなければいけない状況かもしれないし、ある学校はもしかしたら利用者ほとんどいないかもしれないので、学校にゆだねるのは前提だと思う一方で、もう少し手続を一本化してもいいのかなとすごく感じています。また、運営の仕方の中で、もっとテクニカルなことというか、ある学校の事例としてはアセスメントシートを活用したり、特別支援級のコーディネーターと連携を密にしているという声もあったので、それも校内フリースクールの利用方法として、次のステップとして大事かと思います。マイナーチェンジの方の二つ目ですが、19ページ目にある家にいる子供への支援ですね。これは保

護者への支援とすごく連動しているにもかかわらず、保護者に対する支援が手付かずとは言いませんが、まだまだ手薄なのではないかという問題意識を持っています。ただこれを、ある意味トップダウン的に、行政から各学校に保護者への支援をやってくださいというやり方はあまりそぐわないように私は思うので、願わくば、やはり本当に困っている保護者やPTAを中心にするとか、それぞれのやり方で保護者支援を教育行政はバックアップすることが必要と思っています。あと、今度は家にいる子供への支援に対しても、このページのスライドだと、オンラインでの学習支援しかまだ挙げられていない。やはり、ある意味見えにくくて、アンケートをしても、なかなか声を拾えていないのではないかという懸念がある中で、支援の難しさを感じます。そこで、以前にも紹介したことがあるのですが、メンタルフレンドという制度を行っている自治体もあります。ただ、まだまだ少なく、ざっと調べたところ、東京都と神奈川県とかですね、すごく少ないですね。要はメンタルフレンドのコンセプトとしては、先生でも、親でも、大人でもなく、もっと子供にとって話しやすい大人、お姉さん、お兄さんのような人に会って、勉強を習いたければ習えばいいし、一週間に一回ぐらい会えるような制度ですね。これは、例えば児童相談所とかつくば市の場合、調べたところ、こども部の子供家庭相談というところが窓口になって、相談を受けているようですが、家にいる児童生徒への支援は、こういうところがありますよと設置しても、出て行けないところの課題をどうするかとなると、やはりアウトリーチを軸にした支援が必須だと思いました。

市長：どこでやっていると言いましたか。

和泉委員：私がざっと見たところ、よさそうと思ったのは、目黒区のメンタルフレンド派遣事業です。これは教育支援課でやっていて、福祉課が担当するところも多かったのですが、やはり福祉課だと長期欠席の子供なのかどうかという情報はなかなか共有していないと思います。ですので、できればや

はり教育行政の中でやれるといいなと思って探したら、目黒区の派遣事業があって、ここでは長期欠席の子供が対象となっていて、派遣するに当たっては、保護者と子供と顔合わせをして、もちろんマッチングというのはしくじってはいけない大事なところですので、そこは慎重に行いながら、一週間に一度、これも会える場所が選べるというところが、すごくいいなと思いました。子供の自宅をスタッフが訪れる場合と、あるいは可能な子であれば、在籍している学校にメンタルフレンドに来てもらって会うとか、あとは学習支援教室のような場所が目黒区にあるらしく、第三の居場所になるのか、家でもなく学校でもない場所でメンタルフレンドと会うという選択肢が設けられているようでした。ですので、やれそうかなと思ったのは、この目黒区の派遣事業で、ではどういうお姉さんやお兄さんを募ったらいいかと言ったら、つくば市だと結構茨城大学や筑波大学の教職課程の学生とかも来やすいのかなと思うと、割とすぐ着手できそうではと思って今提案をしました。

二つすぐできそうなこととして提案させていただきました。

市長：ありがとうございます。できそうな部分として、もう少し具体的に聞いていいですか。運営の手續の一本化という話がありましたが、もう少しそこを掘り下げてもらって、今どのようなことが起きてるかとか、何をどう一本化するといいとか。

和泉委員：私が聞かせてもらったのは、教員との懇談会のときに、校内フリースクールの状況はどうですかという中で挙がってきた意見で、そこまで具体的にこうして欲しいということは聞いていません。ただし、委ねられることの難しさをすごく感じました。あの学校ではこうだけど、うちではこうだよねという齟齬があるのも、せっかく運営しているにもかかわらず、あまりウィンウィンにならないのではという懸念もその時ありましたし、ですので、先ほどの資料の11ページに載っていると思うのですが、とある学校の段階別支援目標というのはすごくわかりやすいかと思いました。こういうパツと一

目で見てわかるものがあると、先生も、子供も保護者も校内フリースクールを使うにあたり、どうしていったらいいのか、手続を踏みやすいと思いました。

市長：ありがとうございます。今そもそもフリースクールを利用したい保護者や子供がたどるプロセスはどういうふうになっているのですか。

教育相談センター小野所長：子供から発信の場合もありますし、子供から保護者に相談して保護者から話がある場合もあるので、様々だとは思いますが、担任にまず話しがあると思います。もしくは学年主任ですかね。そこから各学校の手続によって、利用を進めていくとなっています。

市長：その各学校の手続の部分が知りたいのですが、私もそれなりに聞くのは、結構手続が面倒くさいというか、面談をしないといけないとか、そういうものがあるから、気楽に行きたいと思っても、なかなか行けなくなってしまうというような声を聞いたりしますが、その辺の問題意識はどうですか。

教育相談センター小野所長：このルール作りに関しては、そもそも令和6年の3月に各学校に校内フリースクール運営に関する基本方針というものを配布しました。そこが一応共通認識の部分ですが、そこに手続はこうなさいというのは明記していません。それは先ほど和泉委員からもありましたように、各学校において課題意識があります。例えばあまりフリーにしすぎると、集まりすぎてしまって、うまくいかないのではないかという恐れを持っている学校は、ある程度最初の段階での担任の判断や保護者との相談という手順を設けてる学校もあります。もちろん基本的に、フリースクールの運営の基本方針の中には、教室に行きづらいときや教室に居づらいときに気軽に利用できる居場所とするというのは前提としているので、そこを鑑みて、一時利用は簡単にできるようにしているという学校が多いと私は認識しています。ただ和泉委員のおっしゃるとおり、学校の中には価値観があっ

て、こうした方がいい、ああした方がいいという先生方の色々な意見がぶつかる中で、ルール作りに困ってしまっている、迷っている学校があるのも実態ですので、そういう部分に関しては、研修の中で様々な学校の情報を参考にできるようにして、そこでいい形のものを探してもらうというような段階を進んできたのが、今年の段階であります。今後その運営方針を見直す必要があるのだろうという認識は持っています。

市長：どのように見直していくのがいいと思いますか。

教育相談センター小野所長：教室に行きづらいときに気軽に利用できるという入口部分のハードルが高すぎるのはやはり校内フリースクールとしてはどうだろうかという課題意識は持っているところです。学校差がある現状もありますので、そこは確認しながら、もう少しこの方針に沿った運用ができるような働きかけができるというふうに考えています。

市長：そうですね。すでに方針と現場が矛盾してしまっているところですね。たくさん来すぎると困るから、少しハードル上げようとなったらもう本来の役目を果たせないし、逆にもっと本当に早い段階で来てくれれば、普通にすぐ戻れたかもしれないケースが、そうならないで我慢してしまっという可能性があるということですからね。少しハードルを高めにしてしまっている学校は何校くらいあるのですか。

教育相談センター小野所長：そのハードルの高さも様々だとは思いますが、こちらで確認したところは、一応相談させてもらって、運営の方法については、見直しを図るとまでは言えませんが、相談をさせてもらっているところは現在2校あります。

市長：だけど学校の中ではやはり、さっき言葉を選んでいましたが、そんなのを使わせなくていいみたいな空気もある先生もいるということですね。それで学校がまとまらないということですね。

教育相談センター小野所長：私の耳に直接入っているわけではないですが、き

っとお悩みになられている担当の先生たちの裏を考えると、そういう意見との兼ね合いが難しい状況が生じているのだろうなというのは想像しております。

市長：森田教育長何かありますか。

森田教育長：入級のシステムもいろいろですが、まだまだ私にとっては、すべての先生に考え方が浸透していないなというのをこの前の懇談で感じていて、中には、ドリルを持っていかないと行っはいけないよ、みたいな先生もいるように聞いたので、これは問題だなと思っています。でもそれはその先生が思っているのか、保護者に勉強させてくださいと言われているのか、それは分からない。その時の様子だけでは。ただ、保護者の方の中にも、あそこに行ってもいいけど、ドリルか何かを持って行って勉強していないと駄目だという考えの方もいらっしゃるということなので、その辺の考え方をどう浸透させるかというのは、結構私たちにとってハードルが高い、伝えたつもりでも、なかなか運営ではその通りにはいっていないというところもあると思います。

市長：今いろいろアセスメントシートとか、コーディネーターとのコミュニケーションという話もありましたが、今の議論を聞いて、和泉委員どうですか。

和泉委員：まず実際に運営に携わっている先生たちの聞き取りや状況をもう少し拾うこと。そして少しでもいい事例やうまくいかなかった事例を片っ端から挙げてもらって共有する、それが自分の学校では機能しそうだとか、そこが結構大事かなというのは懇談会ですごく思いました。ですのであまり学び推進課から降りてきたみたいなものではなくて、先生方同士で話し合った方がいいと思います。あと、学校の規模が近いと、やはり共有しやすい様子も伺えました。当然と言えば当然ですけど。そういう先生たちが話し合える機会の提供があったらいいのではと思います。

市長：教育局は、各学校のそういう小さなことも含めた取組は、どれぐらい把握していたり、まとめていたりするのですか。

教育相談センター小野所長：研修を6回やっているのですが、その中でフリースクールの支援員さんや補助員さんたち同士の情報交換というのは当事者も一番望んでいるところで、そこで挙げてもらっているものについては、こちらでも把握して、そういう意味では色々な学校の状態や困り事を把握しているところです。あとは随時、訪問とかで伺わせてもらって、先ほどの写真もそうですが、別の訪問で行っても、フリースクールの様子を確認させてもらって、全校の写真を集めています。

市長：各学校の好事例とか困り感みたいものについて、やろうと思えば表も作ることができるぐらいの情報量はありますか。

教育相談センター小野所長：6回研修をやってる中で、必ず振り返りのところで、現在の課題とか、うまくいっている部分については、教えてくださいという項目もありますので、支援員さんや補助員さん、教職員から情報は集めています。

市長：今の和泉委員の話だと、担当してる職員と管理職とのギャップみたいなところがあるんですか。どういうところに担当の先生が悩んでいるのでしょうか。

和泉委員：判断に困るのかなとは思いました。一人ではやはり判断できないけれども、管理職の先生も忙しいし、全部現在進行形で、同じ情報共有できてるかというとなかなかできていない。だけど、目の前には過ごす子供がいる。そうするとどうしても、好きに過ごしていいよ、になってしまわないかと。この時に挙がってきた課題で、過ごし方を子供の主体性に委ねることの難しさ、突き詰めるとそういうことです。これでいいのかなという疑問はすごく感じているのではないかと思いました。ですでの、今の支援員、補助員の事例を挙げてもらうのに加えて、利用している子供の実感とか思いとか、

そこも多分あまり聞けていないような気がします。そこで安心したという言葉が出てくればそれなりに機能してるのかもしれませんが、一方で、それでいいのかなと、どうしたら改善できるのかというのを考えるに当たり、子供の実感は聞く必要がありますね。

市長：アンケートの回答は、必ずしも多くないのですか。子供にとってアンケートは教育委員には共有していますかね。Sルーム利用者の保護者と子供へのアンケート。

教育相談センター小野所長：全体の不登校児童生徒へのアンケートは共有しましたが、校内フリースクールは共有していません。今年度もアンケートを取る予定でいますので、今の観点を入れながら、共有できるようにします。

市長：そうですね。共有してもらいましょう。全体のアンケートにも手続が面倒くさいとか、ハードルが高過ぎるというようなことが書いてありましたし。ではそれは共有してもらおうことにしましょう。

アンケートでのコメントにはどのようなコメントがありますか。全体的な印象としてポジティブなコメントとネガティブなコメントと、どうですか。

教育相談センター小野所長：印象に残っているのはポジティブなものが多いのですが、先ほどの子供たちの声という部分で上がってきた声がやはり大部分でした。正直ネガティブな子は答えないという可能性もあります。

市長：そうですね、声にならない声ですね。

教育相談センター小野所長：そこら辺も少し考えなければいけないと思います。

市長：和泉委員は、これで本当にいいのだろうかみたいなことを言っていましたが、どの辺が気になっていますか。

和泉委員：過ごし方として、やはり学習の部分の次のステージだと思います。学校の中にとりあえず安心していただける場所がある。その次にどう接続したらいいか。支援員、補助員としては、やはり学習権の保障という意味でも学

習はすごく大事ですが、ではドリルをやりなさいというのは違う。そこをやりたい気持ちを喚起させるとか、子供によっては教室の様子を見たい子もいるというのも聞いたことがあります、その次の学習への取組がすごく大きな課題なのではないかと思います。最初は給食を食べるだけでも全然いいと思います。

市長：そこを急ぎたくはないですね。その辺柳瀬委員はどうですか。少し自由に話していただいて。

柳瀬委員：今の市長からの質問には答えたいと思いますが、棒グラフで示してもらったらよかったなと思っていて、今座標を見ると、187人ですから、大体2割ぐらい、10人いたとして2人は校内フリースクールを利用してる。あそここここ広場とつくしの広場に行っている人が47人だから、2割にはいかない、何人かいて、引き算すると76人が民間のフリースクールとすると、大体1割、そうすると全くアクセスできてない子供が117人です。相談にもなかなか行けないという状態の子供が、やはり全体の1割ぐらいいる。ここがすごく問題なので、さきほど和泉委員が話していたように、どのようにアクセスするかについて、教育委員会やいろいろな話合いの中で、やはり第一義的には担任がいるので、担任がきちんと面談をするなりして、面談をするだけでも相談に繋がると考えると、全く受けてないということはありませんよね。そこでカウンセラーや支援員はいますが、ケース会議を開くのは、やはり担任が開かないとできないと思います。支援員の方は時間がバラバラで、一堂に会するためには手当を出してあげないと、時間に来られないという話もこの前しました。具体的にケース会議をきちんと持てるようにしてあげて、どこにも全部アクセスできるという体制はきちんと取って欲しい。カウンセリングの予約を取らないと駄目とか、校内フリースクールもそういう意識が少しあるとすると、来ていいのか悪いのかというところから始めることになっていて、子供中心に考えると、それはどうでもよくて、今は

その子の状態をきちんと見てあげて、今何が必要なのか、少し先には何が必要なのか、子供に何が必要なのかをまず考えなければいけない。予約がないと駄目という体制だけはやめて欲しいなと思います。いろいろな方法があるので、最低限担任は必ず掌握してるとすると、予約は取らなくてもまず相談には応じられる、その支援が集まってくる、専門家にも見てもらえるような体制をとるといいのいい。どうでしょう。

教育相談センター小野所長：ありがとうございます。スクールカウンセラーの方の予約のことですかね。

柳瀬委員：そうですね。スクールカウンセラーは完全に予約だし、スクールカウンセラーは自分から出向いてはいかないわけですよね。ソーシャルワーカーは学校以外にも出向いていけるけど、という話ですね。今度は学校相談員もできているし、少なくとも担任、管理職の人はいつでも相談に乗れますよね。そういう間口を広くして、スクールカウンセラーは、情報と本人との希望を突き合わせて、今どういう状態かをアドバイスすればいいと思います。相談はスクールカウンセラーと思わない方がいいと思います。

教育相談センター小野所長：承知いたしました。本当におっしゃるとおりで、スクールカウンセラーの予約状況は学校によってまちまちですが、何週間か先まで埋まってしまっているという状況が生まれてるのは、学校によってはあります。そういったときに、カウンセラーでないと相談できないというのは違うし、柳瀬委員のおっしゃったとおり、間口が広がるような取組が必要だと思います。大抵の学校では、予約できないから相談しないということはないと思いますが、再確認していこうと思います。

柳瀬委員：それで今市長からあった質問ですが、その子が今何を必要としてるかというのは、複数の目で見ないと駄目ですよね。親が分かっているかという、もしかして親も偏見があったりするかもしれないですよね。とにかくケース会議を開くしかないと思います。それがあって初めて校内フリースク

ールでその子供にどういうことが提供できるかという議論が始まるわけで、校内フリースクールは何なのかという議論はスタートしないと思います。この前の先生方との懇談会でも、各学校全然違ったスタンスだというのが分かりました。それは先生たち発言からすると、子供たちに合わせてそうしてるんだという、訪ねてくる子供たちに応じて対応してると、みんなへの対応がバラバラになりました、ということでした。ですが、基本はその子にとって何が必要かを考えるということで、研修で共有されてるというけれど、研修ではなく、勉強会を開いてくださいと言っています。先生たちが主体的にこの問題についてどうでしょうという意見が出てきて、いろいろな経験を持っている方々の意見でケース会議を開く、いろいろな意見を聞くというような形の能動的な学習会がいいかなと、研修でも結局はそういうことをやっているのだと思うのですが。福祉の現場だとケース会議ばかりです。いろいろな議論があっても、では現場でどうするかという話ばかりしている。そういうのを横でつなげていく。担当が変わることもあります。支援員が変わり、フリースクールの担当の先生が変わるでしょうが、きちんと引き継ぎできているのか、どうですか。

教育相談センター小野所長：研修会や勉強会という形の部分では、もちろん運営する側の人たちにとっては、いろいろな視点が必要になってくると思うので検討していきます。柳瀬委員がおっしゃったように、ルール作りにあたっては、学校の先生たちが子供たちに合わせてやってくれているという、まさにそこが狙いのところで、うちの学校はこういうルールだから、ということではなく、同じ学校でも子供たちが入れ替わり、変わってくれば年度ごとに変えていくというところが絶対必要だなと考えています。その部分をご理解いただいて動いてくださってる学校は非常に多くなっていると思っています。

柳瀬委員：不登校者数より利用者数の方が多いわけですね。その線引きを先

生たちも迷ってる。不登校の子供たちのためのフリースクールでだと言われてしまうと、少ししんどい思いをしている子供たちは、不登校者数ではなく利用者数に入っていて、現場の先生がどこまで見られるかというところで、まさにそういうルールありきの対応をせざるをえない。兄弟が行っているから、情報が分かっている、あそこいいから行きなさいよとなって、兄弟が行くケースとかの報告がありましたが、どこまで柔軟でいいのですか。そして、不登校者数というのは氷山の一角だと思います。氷山が上に出ているのは大体 3 割程度であとの 7 割は水面下です。3 倍くらいケアしなければいけない子がいると考えなければいけないですが、その子供たちが利用者数のところに含まれていていいのかどうか、その辺ははっきり言ってあげたほうがいいですよ、難しいですけど。

教育相談センター小野所長：先ほど言った運営方針のところで言いますと、利用者に関して言えば、欠席日数を理由に、校内フリースクールの利用を制限することはできないと明言しています。ですので、不登校になったからとかではなく、もちろん教室に居られないという状況が生じた時点で使う権利はあるということは明言しています。そこに即した使用ができるかどうかという部分もありますね。

柳瀬委員：支援クラスか校内フリースクールかという選択肢で迷っている子供がいるというのも聞きましたし、学級崩壊になってしまった時に、この子は誰かが見なければ収まらないよねとなった時に、校内フリースクールでいけるとか、そこまで柔軟にできてしまっているのですかね。

森田教育長：そうならないとだめですよ。

市長：福祉だと、本当にケース会議というのが前提ですけど、どれぐらいこういうケースでケース会議をやっているのですかね、学校では。毎利用ごとにそれぞれ利用者から相談があったらケース会議を開くことにはなっているのですか。

教育相談センター小野所長：ケース会議の大小はあるとは思いますが、隣のクラスはいいのにうちのクラスが駄目とか、そういう状況を避けるためにも、学年担当や生徒指導担当、校内フリースクールの担当の先生を入れて、共有をしたり、低学年だと勉強の部分の心配もあるから、親御さんと連携して、計画を立てるといふようなところまで含めて、フリースクールにつなげていくという会議は行っています。

市長：ただそれがあるゆえに、なかなか利用に繋がらなかったりすることもあるのですよね。

教育相談センター小野所長：そうですね、お試し期間というものを明言していない部分もあるので、もし案として入れるならそういうところかなと思います。学校の規約に限らず、お試しで使える、緊急で使えるという条件も入れてくださいという話を持っていくと、繋がるのかなと思います。現状話し合いが終わって、保護者の同意がないと利用が難しいと考えている学校もあるのは事実です。

市長：坂口委員いかがでしょうか。別にフリースクールに限らず、不登校全般についての問題意識とかもう少し広い範囲でも全然構いません。

坂口委員：たくさんあるので話がまとまらないかもしれませんが、まず、私自身のこれまでの経緯で、子供たちからフリースクールを作ってくれと結構言われています。学校を作るのは結構大変なので、実際にこの冬からプレを始めたというのもあって、実際にその人達の声を聴いています。あと私たちでやってる活動としまして、「森のようちえんあなたとわたし」という名前をつけていて、これなぜかといいますと、私自身のありのままを受けとめられることがまず前提で、それができるとあなたのことも認められるようになるという、多様な場で自分自身が認められると、相手のことも認められる、受けとめ、認め合う場というのを目指してやってきました。その中で試行錯誤しながらどういうふうにやっていくか、やったらいいかということを考え

てきたという私のバックグラウンドがあるので、今回教育大綱や資料を読ませていただいて、理念や目指す姿という部分についてはすごく共感というか賛成しまして、とてもすてきなところを目指してるなということを、改めて気づいたのと、他の市町村からの話をいろいろ聞きながら、つくば市はこういうふうに変えようとしているんだなと、嬉しい気持ちでいます。でも実際、その中で子供たちから不満の声などを聞くときには、実態が多分まだ伴っていないのだろうなというのは感じます。目指している姿はあるけれど、先生方が実際に具体的にどうするか、どうやったらそれを目指せるかというところを、実際先生方から声を聞いているわけではないので実態はわかりませんが、多分そこが大変なのだろうなという想像をしています。そういう意味では先ほど、おっしゃっていたように、自分だけで抱え込まずいろいろな先生方やいろいろな方と、どうしたら子供たちに寄り添えるのか、どうしたら認め合えるのかという場を作るために、先生方への支援が必要なのではないかなというのを思っています。先生方に自信や気持ちの余裕があることが、子供たちに大きく影響すると思います。

資料の13ページに校内フリースクール利用者の声がありますが、実際に私も自分の所の活動で校内フリースクールを利用している子たちの声もいくつか聴くことがあり、あなたの学校はこうだよ、うちの学校はこうだよと、それぞれのフリースクールの意見交換をして、これいいな、行きたいな、という会話をしているところを聞いていたこともあります。そもそも校内フリースクールを利用している子というのは、自分が他の子と違うことをしても、それでも自分の居心地がいいところに行きたいと思える子が行っています。行きたい気持ちはあるけれど、他の子と違うことをすることにハードルを感じる子は行けていないのだなということはすごく感じます。それがなぜかというと、やはり皆一緒にやらなければいけない、評価の仕方とか、そもそも日本の社会風潮だと思いますが、違ったことをするということに対して、勇

気が必要だということがそもそも大人に刷り込まれてるので、子供もそう思ってしまう。だから、気軽にこういう場があっても、利用できないという隠れたところに、そういう思いがすごくたくさんあるのだろうなと思います。そこをどうしたらいいのかということが、そもそも教育大綱の目標にしている多様なものを認め合う、違いを認め合う場作りがうまくいけば、それがハードルを下げるのだろうなというふうに思います。こうすれば認め合えるというのは、それぞれみんな違うと思いますが、私なりのものは持っていて、そういったことをみんなで考えて、共有する場があったら変わってくるのかな。実際にサマースクールにくる子たちで、いわゆるグレーゾーンと言われている子や発達障害を持っている子や学校の集団生活の中でなじむのが苦手という子はたくさんいますが、みんな何しても違っていいという環境にくると、誰がそういう子か分からないくらい皆同じなので、互いに違う場でいいという雰囲気作りをするというところが、そもそも大事なかなと思っています。校内フリースクールができてること自体は、多様な子がいるので、学習支援とかが必要な子であったり、学校が静かな環境であればいいなと思っている子に対しての場としてはすごくいいなとは思いますが、そもそも全体として根本的なところ、互いに違いを認め合う場作りというのができない限り、今の不登校は減っていかないのではないかと思います。

市長：それはフリースクールとかの狭い範囲ではなくて、多様なことを認めることが、学校というか社会全体に広がっていかないと不登校はそもそも減らないよねという問題意識という解釈でいいですか。

坂口委員：はい。昔は不登校がそんなに多くなかったのはなぜかとか、いろいろな部分の中で、ある意味、時代もそうですが、つくば市の特徴でもあるとは思いますが、多様な大人との中で育つ環境が少ないというふうになっていると思います。ですので、子供にとって大人も多様な大人がいて、子供も多様な子がいるので、この先生と合わなかったら、もう他で頼るところがない

というふうになってしまったらもう辛いと思います。実際に学校に地域の方が入ってくださるのもそうですし、保護者が関わってくださるのもそうですし、誰か信頼できる大人ができるような、多様な大人が子供たちと関われる環境があれば、自分を認めてくれる人が誰かいたらいいなというふうに思います。まとまらないままですが、資料16ページの教員による教育相談のところで、先生方はタイミングよく寄り添うようにする、とあって、先生たちは大変だなと思いました。小学生は30人ぐらいですかね、その子たちにタイミングよく寄り添うのを先生1人でやるのは厳しいです。学校の先生、全教員で対応するというのもすごくいいことだと思います。スクールカウンセラーなどを実際増やされたこと自体はすごくいいことだと思っているのですが、先生はやることがいっぱい過ぎて、余裕がなくなっているのではないかと思うので、その苦しい中だとそもそも子供の声が耳に入ってこないだろうなと思います。先ほどの子供の声のアンケートの部分では、多分アンケートを書ける子しか書いてないと思うのですが、最近自分自身を大切にすることについて考えるセミナーに参加する機会があったのですが、そのセミナーで気づいたことで、小学生になると子供は空気を読むようになるというのを聞いて、こういう場を作りました、どうですかと聞けば、大人の期待に応える回答をしてくれるのではないかなと思います。ですので、いいことばかり書く子がいると思います。悪いことを書いたら、目をつけられるのではないかとか、思ってしまうので、そういうときに、この人だったら話してもいいなという大人がいる場がつかれるようにならないといけないなと思います。学校にたくさんの先生が入るといのはもしかしたら今は難しいかもしれませんが、地域の方や関わりたいという方が関わると、生徒1人当たりを見る大人の数が多くなります。向き合える大人の数が増えると子供にとっては、自分の存在を受け止めてもらっていると感じる回数が増えるので、それだけで学校にいることへの不安は減るのではないかと思います。

す。

市長：具体的にはどのようなイメージですか。どういう大人がどのように入っていくといいですかね。

坂口委員：そもそも子供の言っていることをただ聞くというだけで大分子供は違うなと思います。限られた時間の中で学校では授業というプログラムがあるので、それを終わらせなければいけないとなると、最後までその子の話とか全員の話を聞いてあげられないと思います。ですが、どのような大人でもいいと思います、子供嫌いでなければ。先生がそれを全部聞くのは難しいかもしれませんが、例えばそこで聞ききれなかった場合に、引っかかっていそうだった子とかの話を聞く人というイメージですかね。専門でいればいいかなとは思いますが。フリースクールとは別に。

和泉委員：そこに乗っかってもいいですか。まさに自分の親でもなく先生でもなくという大人の存在の意義はすごく言われるようになってきて、それが子供アドボケイトという一つの役割として今注目され始めています。この人は何をするのか、どういう人なのかというと、専門性を持った人では逆にいけない。カウンセラーでもないので、専門的に子供から何か話を聞いたときにこうすればいいよああすればいいよ、ではなくて、その子の思いをその子の側に立って丸ごと聞くだけ。例えるなら、熊のぬいぐるみでいいのですという言い方も聞きましたが、多分その役割があればいいのかなと。まずは色々なことがクリアできるような感じもします。聞いて聞いてと子供は言いますよね。何かを伝えたりとかではなくて、とにかく見て欲しい。そこで自己承認が満たされていたり、その子に対して別に指導もする必要全くないし、注意もする必要はないし、むしろ子供のあるがままを見る役割として、私は子供アドボケイトというのをやれたらいいなというのは実は思っていました。

市長：前の教育委員の小野村さんが、子供アドボケイトの話を結構していて、

当時の教育委員会にいた先生たちとは少しかみ合わなかったのですが、今なら話に通じるかな。少し早すぎたのかなと思います。当時かなりアドボケイトの話はしていましたね。もう7～8年前の話ですので、あまり響かなかったのですが、こういう文脈が積み重なってきて、まさにそういう話になっていくのかなと思います。ありがとうございます。

坂口委員ほかに何かありますか。今の話で言うと、マイナーかメジャーかでいうと結構メジャーチェンジが必要な部分で、根本的に先生の忙しさを何とかしつつ、そういう人を作るということで、もし例えば子供アドボケイトの存在ができてくれば、確かにそれは逆にひょっとしたら人さえいればできることなのかもしれないと思いましたが、他に何か言い足りないことがあれば。

坂口委員：近所のおじさんおばさんの存在というのがないので、今のお話ですとそういった存在のようなイメージですね。どなたでもいい。あとはメジャーチェンジの部分になってしまうのですが、先生方が保護者からの意見や上からの意見に挟まれてるのではないかなと思います。今までは自分の息子がいない状態で小学校に行っているお子さんや保護者の方から話を聞いていましたが、実際に自分自身が中に入って、担任の先生や保護者同士で話したぐらいではありますが、結構昔に比べて大分先生方の考え方も変わってきたんだな、授業の方法も楽しくしようとかこういう工夫や体験を中心にした工夫をされているんだなというふうに感じはしますが、例えば校内フリースクールのことを、私自身が保護者として聞いたものとしては、こういうものができましたというのを、入学式の時に聞いただけですね。実際に困ってから、どういう手続でそうなっているかも知らないということも、実際に私の所の幼稚園の卒園生の保護者から聞きました。保護者への説明はあまりないなという意味で、つくば市がそういった多様な場作りを目指していますよということをお聞きしたいという感じはあります。

市長：そうですね、周知については、議会でも言われたりしてましたし、確かにどうしたらいいのかわからないですね。そういうものが、そういえばあったと思い出してくれればいいですけど、思い出さないケースもあるでしょう。教育大綱の理念の話も、実は問題意識としてはもう何年もあって、なかなか伝わらない。配るだけでは駄目だし。加賀市で活動しているアドバイザーが、つくば市のアドバイスもしてくれているのですが、加賀市ではすごくきちんとした動画を作っていて、動画がかなり見られてるというので、そういうものを作っていくことも必要だよねということで今準備したりしていますが、容易には使わないですね。

では倉田委員どうぞ。

倉田委員：市長がフリースクールを全校に配置してくれるのは、私は深く感謝しております。やはりそういうことによって救われてる子はかなりいるのではないかと思います。私の現場での体験としては、不登校になる子供というのは、学校がもうトラウマになっている。「学校」という 2 文字が。だから学校に行きなさいという言葉もトラウマになっていて、拒絶反応を示してしまいます。ですから、フリースクールの場合には、同じところに同じ時間に行くという学校というものから、自由なところであるということで学校という枠から外れる。それによる効果は非常に大きかったのではないかと思います。ですから、私個人では入居制限は設けるべきではないと思っていて、学校は自由に好きに、自由に行けるところだということを認識させる必要があるのかなと。ですから、名簿というのがあって、きちんと名前が記入できて、そこに今在籍しているというのがわかるだけでも私はいいのかなと思います。ルール作りはそのあとにやってもいいのかなと思います。不登校になりやすい予備軍も含まれている面があるので、そういうところでの集団での関わりやそういうものが学校にいることによって、すぐにまた復帰できやすい、そういう環境に置いてあるのがフリースクールだと私は思うので、そう

いう設置は私は一番すばらしい、理想系だと思います。私が現役の時はその
ができなかったで、夜間登校というのがありました。不登校の子供に、学
校に夜でもいいから来て、勉強しなさいと、教員にはかなり負担にはなっ
ていたのですが、家まで迎えに行って、勉強させました。遊びも含めて学校に
馴染ませる。でもそれは失敗です。なぜかという、夜間は子供がいない。
だから子供同士の関わりはないので、本人も人間関係作りが全く意味を成さ
ないところという認識だから、夜間学校に来させても効果が挙がらなかった
のが現実です。同じ時間に同じところに自分で行っているということは、も
う学校に対してトラウマがなくなっている。そういうものが非常に私は大き
いなとつくづく思います。それでも駄目なところは民間的なところに行く子
もいるでしょう。それで、私が一番懸念するのは、ひきこもりです。ひきこ
もりの児童生徒に対し今後どのように対応していったらいいか。ひきこも
りは早期に対応しなかったら絶対に無理です。そういう子供とも私は関わりま
したが、もう絶対に面会もできません。親も会わせない状況が続き、そうい
う子供は、その中で暴力行為とか、自傷行為とかをして、社会から完全に抹
殺されて、社会との繋がりも全くなくなってしまふ。それが一番怖いですよ
ね。ですから、そういった子供がつくばにはどれだけいて、どういうふう
に今後対応しなければいけないかというのが、私は真っ先に必要な対応だと思
います。フリースクールの場合にはもっとやり方をうまく考えれば、もっと
自由に子供たちは行けるかなと思っていて、それが一番のつくば市の成果だ
と私は思っているで、ぜひそういう完全に途絶えさせられてしまっている
子供の対策というのを、考えないといけな。

市長：117人の部分ですよ。何もまだアクセスできていない子たち。今の倉
田委員のお話の、閉じこもりというような言い方の方が多いかもしれませ
んが、そういうケースは、例えば117人のうち、全く会えていない子たちなの
ですかね。これは面談すらできていないのか、それとも、先生は面談はでき

ているのか。

教育相談センター小野所長：117人についていうと、本人に会えてない児童生徒も含めています。本人に会えてない児童生徒は、去年の117人のうちの数字は把握していませんが、今年度で言うと、66人になっております。児童生徒がどことも繋がっておらず、本人とも会えていない状態の子は、25人です。ただ、この25人に関しては、保護者とは連携をとっています。そういう意味で去年の117人もそうですが、全く家庭に入れていないわけではなく、親を通しての支援もできてない児童生徒はいない状態です。

倉田委員：でも一番困っているのは保護者ですよ。結局その子供に適切に対応できていない現状がある。それは保護者を救う意味ではそれは必要ですが、本人と何とかして関わるような対策を講じないと、根本的な解決には何にもならないと思います。その辺が一番難しいところ。

市長：非常に重要なテーマですよね。（傍聴人に）穂積さんが本日いらっしゃいます。本当に長年この分野で、つくばでやられてきたので、急遽例外的ですが今の議論で全体として感じてることとか、その閉じこもりの部分とか、ちょっと急ですけどいいですか。自由にしゃべっていただいて、まとめなくても全然大丈夫ですから。

傍聴人：「つくば子どもと教育相談センター」の代表をしています、穂積です。今御紹介いただいたとおり、来年度で私たちも30年を迎えます。ずっと不登校支援をしてきたわけですが、今日のお話を聞いてまず一つ、これも偉そうに言うと、つくば市の不登校支援は評価できることがあります。というのは、私たちは毎年不登校の増減をずっと系統的に注視してきましたが、例えば小学校でいうと、2019年から2020年まで、不登校が増えた数46、2020年から2021年まで小学校で増えた数が70、2021年から2022年のここがすごく増えていて146です。ところが今年小学校はマイナス29です。数だけで評価するのは問題かもしれませんが、この減り方は素晴らしいです。中学校も同

じで、例えば2021年から2022年まで、ちょうど100人増えてるのですが、今年は増えた数が0です。全体の児童生徒の数は、つくば市は今転入が多いので、毎年増えてます。それなのに、ここまで減ったということについては、逆に本当に、どうしてこんなに減ることができたのかを、皆さんで十分に考えていただくと良いと思いますが、私もやはり校内フリースクールは、相当効果があったのではないかと考えています。つくば市のいいところは、近隣の阿見や牛久にも私たちは調査に行っているのですが、フリースクール的な場所はあるけれども、きちんと支援員とかをつけていないところが結構あります。管理職が見てくださったりとか、空き教室の先生が見てくださったりとかいう感じなのですが、やはりこういう子供の居場所というのは、場所だけではなく、場所プラス人で、どちらかというとな人が大事です。やはり専任の先生がいてくださる、そういう場所であるという作り方をしたというのが、多分周りの市町村に比べて、そこは素晴らしいと思います。今年から複数配置になりましたよね。これも一人の先生ではなく、二人で見るというのは本当に支援では基本で、保健室の先生の複数配置もずっと要求されてますが、これもとてもよかったと思います。ですので、とにかく今年の数減り方は、きちんと教訓化しないと駄目かなと思って私も喜んでます。あとはやはりみなさんおっしゃっていますが、校内フリースクールの運営方法をいろいろ工夫して、今後もっと良くなっていかれば、いいのではないかなって思っております。あと少し気になったことがあって、お話しますと、どこかで校内フリースクールの段階別支援目標というお話があったときに、私たちの親の会の方にいるある親御さんから、これは私直接見てるのではないので、確固たることは言えないのですが、最後の上がりの目標が、「教室に戻る」というふうにあったという話を聞いております。これはそうではないかもしれないです。ただ、教育機会確保法案ではすでに、学校へ戻すことだけが目標ではないというふうに言われているので、ただ学校でやっている校内

フリースクールだと、教室に戻るというのが目標になるのかなと思ったのですが、その辺が国の考えていることと、やや違和感があるようなところがあるのかなというのは話を聞いていて思いました。ただ学校の中に作っているということなので、学校外フリースクールとはやはり少し立場が違うのは当然だと思いますが、国が出している教育機会確保法案との整合性みたいなところも考えていただけるといいのかなというふうに思っております。でも本当にこの一年の市のいろいろな努力は本当に素晴らしいと思いましたので、それは不登校の支援をしている者としてぜひお伝えしておきたいと思います。以上です、ありがとうございました。

市長：大事な御指摘ですよね。手元の資料だと見えなかったのが今拡大してもらいましたが、やはり書いてありますね、段階別では。だからそういうゴールでいいのかということですね。教育長も議会答弁の中で、教室に戻すことを目標に、目的にしないというようなことは、言っていると思うので、その大きな方針についてはきちんと共有をしたほうがいいですよ。各学校任せではいけない部分だと思います。御評価いただけたのはありがたいのですが、一方で例えば、閉じこもっている子供に対して、なかなか我々もできていないことがたくさんありますが、今の倉田委員がお話したような、本当にアクセスできない時には、我々はどのようなことをしなければいけないのか、いろいろな事例を見てこられている中で、どういうアプローチをすべきだとか、もしアドバイスがあればいただきたいです。

傍聴人：いわゆる家庭内閉じこもりとか不登校からもう長期の閉じこもりになってしまうお子さんはやはり一定数いるのですが、私たち民間の支援でもとても大変です。ただ、そういうふうになってしまうお子さんは、やはり結構初期対応のところで、家庭や学校が本人の気持ちを大事にできなかったということがあります。無理やり登校させたり、無理やり連れて行ったり、あとは学校に来たときにもう帰りたかったのに返してもらえなかったとか、そう

いう話もあったりするので、これは予防的なところかもしれませんが、とにかく子供が一番不安定な不登校初期の対応というのを精査する、大事にするというのはすごく大事だと思います。それから実は私はフリースクールのむすびつくばの方で、学校連携の仕事をしていて、むすびつくばに来てる子供さんの学校は全校、年一回以上回っているのですが、そこで話をしたら、先生方は全然会えないが、うちのフリースクールの方には来てる子はいたりします。その辺の情報交流をきちんとして、誰かひょっとすると関われるかもしれない。学校の方で把握できてなくても、そういうケースもあるので、先ほど近所のおじいちゃんおばあちゃんという話もありましたが、そういう誰かが関われるかどうかというのを確認することも大事ななと思いました。不登校は基本的に病気ではないので、医療に関わるというのは避ける傾向もあると思いますが、やはり難しい状態になりそうなお子さんは、医療との関わり、医療のアウトリーチを利用することを考えたほうがいいと思います。

すみません、色々話をさせていただいて、ありがとうございました。

市長：ありがとうございます。やはり長い知見がございますので、おっしゃるとおり、さきほど倉田委員もおっしゃっていましたが、初期に間違ってしまう、大人の側がやらかしてしまうと、これはどうにもならない状況までいってしまうと思います。確かに医療的な関わりをすべきケースというのは間違いなくあるなというのは感じます。ありがとうございます、これからもいろいろとよろしくお願いします。

では、森田教育長、まとめではないですが、いろいろな課題感とか話していただいていいですか。実は和泉委員からあったメジャーな方について話していないから気になってはいるのですが。

森田教育長：本当にまだまだやらなければいけないことがたくさんあるのだなというので頭が重くなっていますが、穂積さん（傍聴人）に成功しているところもあるよということを言っていたので本当によかったなとも思っ

ています。私もきっとコロナのあとは不登校が増えてしまうのだろうということは考えてました。ですので、とにかく校内フリースクール、国は多様化学校ということを言ってましたが、遠くに一校あってもそこに行ける子は少ないだろうと思ったので、校内フリースクールという形で子供を救っていくことはきっと役立つだろうと思って谷田部中学校で、県のモデル校としてやってもらって、そこから皆さんの議論で、市長ももちろん認めて、できる人がついて、好循環になってきたことは確かで本当にそれはよかったなと思いました。そういう中で坂口委員から新鮮な意見をいただいたところで、やはりそこが自分にとっては一番大事なんだろうなと。フリースクールが必要ないくらい学校が楽しいとなってくれたら一番いいと思います。そこを目指して自分もいろいろ先生方に伝えていて、同調主義はもうやめようねと言っているわけですが、なかなかそこが浸透しないというところをどうしようかというのが、いつも考えているところです。一つは、不登校になる、フリースクールに来る子というのも、みんな一人一人違いますよね。ですから同じように対応しても駄目だと思うので、それを家族というか保護者としてしっかり共有しないと、さっきの話ですが、ドリルをやらないと駄目だという保護者の意見で、学校の先生が困ってしまうみたいなところもあるので、どういうステップで変わっていくのか、今お子さんがこの状態だから、今はこういうことをしましょうよという相互理解ができるようにしないといけないだろうと思っています。個別の支援計画みたいなものを皆で共有しないといけない。そのためには、ワークショップとか、ケース会議も必要ですし、あとは研修も大事だと。ただ、研修については、研修に参加した一部の先生は、本当に良く理解するだろうけど、その周りの先生にそれをどう広げていくかというところが、まだまだ弱い。ですから、つくスマアプリではないですが、教員のためのつくスマアプリみたいなものを作って、この前の研修でこんなことをやりましたよというのがストレートに一人一人に伝えられるような、そん

な仕組みでもない駄目なのかなと思っているところです。文科省の施策もそうですよね。一人一人の先生には文科省が言っていることもなかなか伝わっていかない。伝言ゲームなので、なかなか伝わらないというのがあるので、そこを脱する方法はないのかなというのを今考えているところです。とりあえず今、たくさん課題はいただきましたので、一つ一つ皆と相談して、またやっていきたいなと思っています。初期対応が大事だというのは、本当にそう思います。先生方のまず初期対応の力をつけなければいけないと思っています。

市長：せっかく色々な御意見を出していただいたので、教育局で議事録とは別で論点を整理して、先ほどメジャー、マイナーという話もありましたが、すぐできることが何か、教育局として方針を示したほうがいいことは何か、その辺の整理はしてもらったらいいいですかね。せっかく色々な御意見が出ましたので、ぜひそれはやってもらって、また委員さんたちに共有してもらってということをお願いしたいなと思います。

最後に少しだけ時間がありますので、和泉委員からメジャーチェンジについてどうぞ。言いつばなしで終わる可能性があります。

和泉委員：はい。皆さんの意見から実は出ていることで、モデルチェンジだと私は認識していたのですが、資料の4ページ（1）と（2）の部分です。坂口委員が言っていた様に、その初期対応の大事という意味でもまさにここですし、初期対応の大事さという意味でも未然防止が次のステージにあると思ったときに、ここ、（2）の②は、教育大綱について考える中で進めてきている部分だと思います。

市長：②は確かに、指導主事の訪問とか根本的に変えている部分ではありますね。

和泉委員：もちろん今後も追っていく必要はありますが、①の部分が一番のネックではないかと思います。やはり同質性や管理主義を打破することを、考

えていく必要があるし、教育大綱について取り組む中でも私が常に感じているのは、学校に来ていないとか、学校に来ることができていない子にとっての学びや、学校にいても、学習に困難がある、もしくは性自認の問題を自分の中で抱えている、あと外国籍の子供、または困窮家庭だったり、先生たちからよく聞かれるグレーな子供という存在の子供たちも含めて、すべての子供に、合理的配慮ができる学校という姿が、最終的に目指すところだと思います。皆さんそう思いながらも、それを具体的にどうしたらいいかという話し合いをしていく必要があると思います。ある意味、メジャーチェンジとは対照的な対処療法的かもしれませんが、そういう施策がこれまで出てきましたが、これからは初期対応で防ぐ意味でもそうですし、抜本的なモデルのチェンジというあり方を問う議論を進める必要があるというのが、二つ目の課題でした。

市長：ありがとうございます。確かにメジャーな話ですけど、本質的な話ですよ。

森田教育長：先ほど言いましたが、県のモデル校として校内フリースクールを2年前に谷田部中でやったのですが、去年申請して今年からやっている吾妻小学校で、まさに不登校やいじめにならないようにするための学校作りというのはどうあるべきなのだろうかというところを、吾妻小で研究してもらうように、県のモデル校に指定しています。人間関係作りのソーシャルスキルとかそういうことにまずは目がいっていますが、その辺を修正して、あの地域は外国人も多いので、今おっしゃられたような面を持たせて、研究の視点をまた深めていければなと今思いました。

市長：この辺りが子供の根源的なところに繋がってくるし、別の市の会議でこの間話したのですが、子供の自殺がまた更新してしまっていて、これは本当に耐えられないニュースなのですが、こういうみんなに居場所をどのように作るかということも含めて、我々が考えていかなければいけないわけです。ど

ういうふうにしていくのがいいのか。今、和泉委員の話を聞いて思い出したのは、みんなの学校という木村さんという女性が校長をやっていた頃、見た方も多いと思いますが、それと、最近流行った「小学校」という映画ですね。これは私からすると、とても見てられなかった。ただ、私がそれ以上に感じたのは、これに対する評価の高さというか、その映画に対する評価というよりは、学校はやはりいいねというような、この中身を見て違和感を感じていない人の多さのようなものに、すごく怖さを感じて、別にその違和感を強要するものではないのですが、まさに多様性とか個性は多分全然認められていない世界が映画の中にはあるのですが、そういうものを犠牲にしても、何かを成し遂げることがいいという教育観が支配をしている世界が肯定をされてるところに、非常に暗澹たる気持ちになっています。皆で鑑賞会でもやるといいですかね。学校の先生がこの映画を見たらどう思うのだろうか。やはり我々は間違っていないと思ってしまうのですかね。辛かったです私は。

森田教育長：ただ、一ついえることは、やはりいろいろな考えの人がいるのだということ、私たちはどう受けとめて、その人たちにどう理解を得るようにしていくかというところの、難しさというか、大切さというかそういうのがあるんだと思います。

市長：おっしゃるとおりですよ。先生も色々な人がいますので。ということで、時間が来ました。何の結論も元々出すものではありませんでしたが、アクションとしては整理をしてもらって、できることは改善をしていく。少し長期的な課題もたくさん出ましたので、そこもアクションはかけないかもしれませんが、まず課題として置いておいていただいて、また随時この総合教育会議で話をしていくことも必要だと思いますし、そういう意味では、多様性や個性を認める学校は一体どうすればできるかとか、さっきの子供アドボケイトの話も含めて、子供が安心していられる場所、マイナーとメジャーと両

方の話があると思いますので、そのあたりは継続して話をしていきたいと思っていますので、ぜひ引き続きよろしくお願いします。

坂口委員は今日初参加でいかがでしたか。

坂口委員：話したいことがたくさんあって足りないですね。

市長：そうなんですよ。この場はそういう場所ですので、話したいことがたくさんある人が集まっている場なので、ぜひこれからも遠慮せずに、別にこの機会ではなくても、様々な機会をとらえて御発言いただければと思います。引き続きよろしくお願いします。

穂積さん（傍聴人）も今日は突然すみませんでした、ありがとうございます。またよろしくお願いします。

和泉委員：すみません、一ついいですか。不登校に関連して、筑波大学大学院芸術専攻の大学院生が、まとめた冊子があります。ONENESS（ワンネス）というタイトルで、学校に行きたくないあなたのためのサポート図鑑というもので、これはいつも年度末に美術館で、筑波大の芸専の院生の作品展示があるのですが、そこを見に行った友人から、すごくよかった、学校に置いてほしいくらいと聞いたので、急遽本人にコンタクトをとってみて、今日の午前中会ってきました。一冊差し上げますと言われて、頂きました。これを作った思いというのは学校に行けてない子供たちにまず情報を提供したいと。この章立てが、ここまで包括的なものはないというぐらいのもので、学校に行きたくなくなったら、どういう施設やどういうところが、支援の先としてあるかが書いてあり、この分け方が、学校、学校以外の公的機関、出席扱いになるためには、いろいろな施設があるとか、あと民間施設と地域、学校公的機関民間病院大学のカウンセリングを比べてみたとか、電話、メールでチャイルドラインとか子供の人権とか警察の少年相談窓口もいろいろ網羅していて、本当にここまで網羅しているものはないなというのにまず驚きました。A4にした理由というのは、見やすさを重視したそうで、ただ、参考文献がす

ごい数で、彼女が一つ一つ当たって、厚労省と文科省の情報も確認しながらまとめたのですが、その問題としては、やはりすべてをチェックはできる人がいない、指導教員は、これ一つの作品ですので、そういうチェックはしていないけれども、もし何か今後活用してもらえるのであれば、とても嬉しいし、届けたいということは、言っていました。学び推進課の方にも去年の春ぐらいに、これを作るためにいろいろインタビューさせてもらったそうで、それを論文に活用することはできなかったけれど、お世話になりましたとも言っていました。これをこのまま眠らせておくのはもったいないので、ひとまず皆さんに見ていただくのもいいかなと思うと同時に、常に情報が変わっている現象がありますので、そこのチェックをして、お金があれば出版できますかねみたいな話も彼女にしました。つくば市にこだわらずには作ってけれどもつくば市で活かしてもらえるのであれば、という思いは聞いてきましたという報告です。なのでぜひご覧ください。

市長：後できちんと見せてもらいますが、不登校の子供全員に配るぐらいの予算をね。

和泉委員：彼女としては、読んでもらって、今学校に行けなくても大丈夫だよと伝えたい。すごいなと思ったのは、子供の声をいろいろ聞いています。相談する際のメールの書き方、電話のかけ方も入っていて、相談窓口にどう話したらいいかわからない子供がどうやらいるというのを聞いて、こういう記事を載せたらいいいのではないかと思いながら、作りましたと言っていました。

市長：確かにファクトチェックとかをきちんとしたら。

柳瀬委員：デザインが専門ですか。

和泉委員：そうです。

市長：つくば市でもし何かやるならつくば市の情報をどう出していくかということですが、これはこれで一つの全国版という感じでしょうからね。

様式第 1 号

和泉委員：彼女の働き方とかもあるので、早急にはできないですが。

市長：改定とかがなかなかすぐできるものでもないかもしれませんが。

和泉委員：書いてあるフクロウのマスコットもつくば市をイメージしましたと言っていました。

市長：ありがとうございます。よく見せてもらって、どんなことができるか検討したいと思います。他に何かあれば、大丈夫ですか。

事務局（総務課）：それでは以上をもちまして、本日の会議を終了させていただきます。ありがとうございました。

令和6年度(2024年度)第5回つくば市総合教育会議次第

日時：令和7年(2025年)2月20日(木)

午後2時15分から午後4時15分まで

場所：本庁舎5階 庁議室

1 開会

2 議題

不登校の対応について

3 閉会

事務局：総務部総務課

教育局教育総務課

つくば市総合教育会議 構成員名簿

職 名	氏 名
市 長	五十嵐 立青
教 育 長	森田 充
教育委員会委員	柳瀬 敬
教育委員会委員	倉田 廣之
教育委員会委員	和泉 なおこ
教育委員会委員	坂口 まり



つくば市の不登校に関する 児童生徒支援の在り方

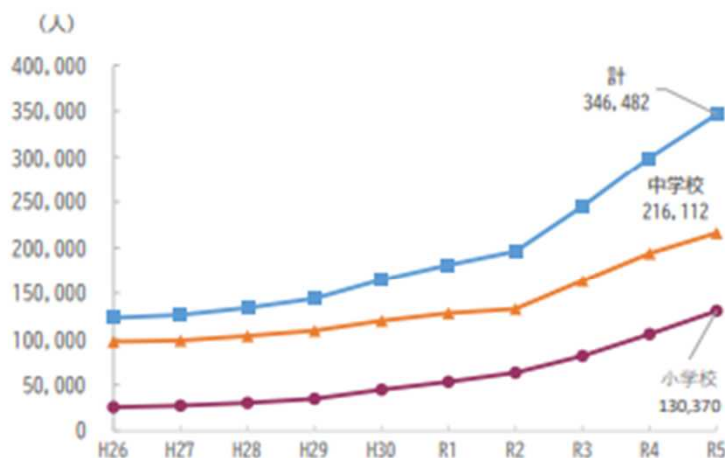
つくば市教育局学び推進課



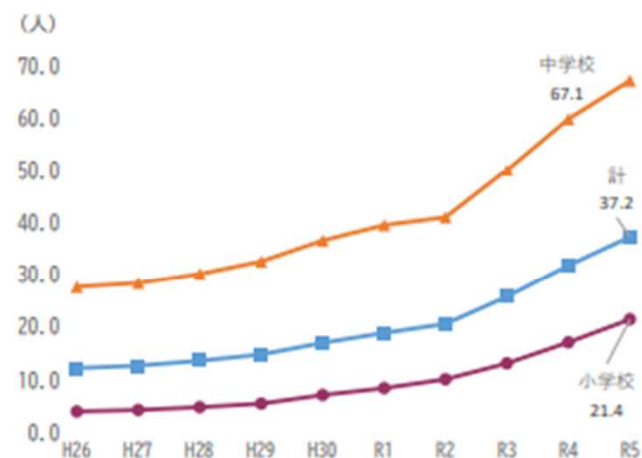
小中学校における不登校の状況

- 小・中学校における長期欠席者のうち、不登校児童生徒数は346,482人(前年度299,048人)であり、児童生徒1,000人当たりの不登校児童生徒数は37.2人(前年度31.7人)。
- 不登校児童生徒数は11年連続で増加し、過去最多となっている。

不登校児童生徒数の推移



不登校児童生徒数の推移(1,000人当たり不登校児童生徒数)



不登校児童生徒数(上段)と1,000人当たりの不登校児童生徒数(下段)

	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
小学校	25,864	27,583	30,448	35,032	44,841	53,350	63,350	81,498	105,112	130,370
	3.9	4.2	4.7	5.4	7.0	8.3	10.0	13.0	17.0	21.4
中学校	97,033	98,408	103,235	108,999	119,687	127,922	132,777	163,442	193,936	216,112
	27.6	28.3	30.1	32.5	36.5	39.4	40.9	50.0	59.8	67.1
計	122,897	125,991	133,683	144,031	164,528	181,272	196,127	244,940	299,048	346,482
	12.1	12.6	13.5	14.7	16.9	18.8	20.5	25.7	31.7	37.2

23

(出典：令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要)



つくば市における不登校児童生徒の推移

◆不登校の推移（病気欠席を除く年間30日以上欠席）

〔児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査〕

	令和元年 (2019年)	令和2年 (2020年)	令和3年 (2021年)	令和4年 (2022年)	令和5年 (2023年)
小学校(人)	125	174	243	389	360
中学校(人)	203	223	361	449	449
合 計(人)	328	397	604	838	809
不登校出現率(%) 【つくば市】	1.59	1.88	2.70	3.74	3.57

児童生徒数(R6.3時点)：小学生 16,276人、中学生 6,632人 計22,908人

学校数(R6.3時点)：小学校 31校、中学校 13校、義務教育学校 4校 計48校



つくば市の不登校児童生徒支援に関する基本理念

- ◆つくば市では、**一人ひとりが幸せな人生を送ることを最上位の目標**とする**つくば市教育大綱**を令和2年（2020年）に策定し、各人の違いが受容され、それぞれが持っている多様で豊かな個性が花開く環境をつくるとしている。
- ◆つくば市教育委員会では、**つくば市の不登校に関する児童生徒支援の在り方**を令和5年（2023年）に策定し、**不登校は問題行動ではない**という認識の下、**学校に登校することのみを目標にするのではなく、社会的自立に向けた力を育み、一人ひとりが幸せな人生を送ることができるように、児童生徒の視点に立って様々な支援をしている。**
- ※「社会的自立」については、「社会との関わりの中で、他者との関係性を保ち、他者に依存したり自らが必要な支援を求めたりしながら、自分のできることを広げ、**自分の意志と判断で、選択、決定し、自己実現する**ことである」と解釈する。



目指す学校の在り方の再確認

- ◆不登校は全ての児童生徒に関係があるという認識の下、学校は、一人ひとりの個性・思いやペースの違いを捉えて柔軟に対応し、全ての児童生徒にとって安心と魅力のある場となることで、**児童生徒が登校したくなるような学校づくり**を行うことが必要
- ◆児童生徒の個性や気持ちに配慮し寄り添うという教員の意識、学習以外の様々な学校活動を通して、**お互いを認め合い尊重するという児童生徒の意識**の醸成が重要

【目指す学校像】

(1) 一人ひとりが自分の居場所を実感できる学校

- ①安心を感じられる学校づくり
- ②一人ひとりが自分らしく輝ける学校づくり

(2) 豊かな学校生活を送ることができる学校

- ①多様性や個性を認め、伸ばす学校・学級づくり
- ②分かる・楽しい主体的な学びができる学校・学級づくり



不登校児童生徒への支援策

◆ 学校内における支援

- ①教員による教育相談
- ②スクールカウンセラーによる教育相談
- ③校内フリースクールの整備

◆ 学校外における支援

- ①つくば市教育相談センターでの相談
- ②学級担任による家庭訪問
- ③スクールソーシャルワーカーによる訪問相談
- ④公設の不登校児童生徒支援施設の設置
- ⑤不登校児童生徒の保護者への補助（民間の不登校児童生徒支援事業の利用者への補助）
- ⑥民間の不登校児童生徒支援施設の運営者への補助
- ⑦保護者に対する支援
- ⑧家庭にいる児童生徒への支援



令和4年度長期欠席児童生徒アンケート

不登校児童生徒の願い

- ・好きな勉強ができる学校
- ・ゆっくり休める場所がある学校
- ・いつ行ってもいい学校

保護者の願い

- ・勉強を教えてくれる場所
- ・自由に過ごせる場所
- ・のんびりできる場所



校内フリースクールを全学校に設置



つくば市校内フリースクールの目的

- ◆ 児童・生徒の心身の安定を取り戻す。
- ◆ 社会的自立に向けた支援をする。
- ◆ 個に応じた能力や個性の伸長を図る。
- ◆ 自己肯定感の向上を図る。
- ◆ 通常学級へ戻すことのみを目的としない。
- ◆ 学校に来ることのハードルを下げ、家の外に出られない児童生徒を一人でも減らす。



校内フリースクール設置までの経緯

◆ 設置について

- 令和4年度に中学校1校に試行的に設置。
- 令和5年度に全ての中学校及び義務教育学校後期課程並びに小学校6校に設置。
- **令和6年度に全ての小学校、中学校及び義務教育学校50校に設置。**

※中学校及び義務教育学校後期課程においては、多様な過ごし方により柔軟に対応するため、令和6年度から1部屋増やし、2部屋体制を進めている。

◆ 職員配置について

- 令和5年度は支援員を各校に1名配置。
- **令和6年度は支援員及び補助員を、小学校及び中学校には1名ずつ、義務教育学校には2名ずつ（前期課程、後期課程）配置を基本に進める。**

※支援員（教員免許保有） 補助員（教員免許の有無を問わない）



校内フリースクールの様子①（小学校・前期課程）

世界の
あしたが
見えるまち。
TSUKUBA



安心できる環境の整備



リラックスできる場



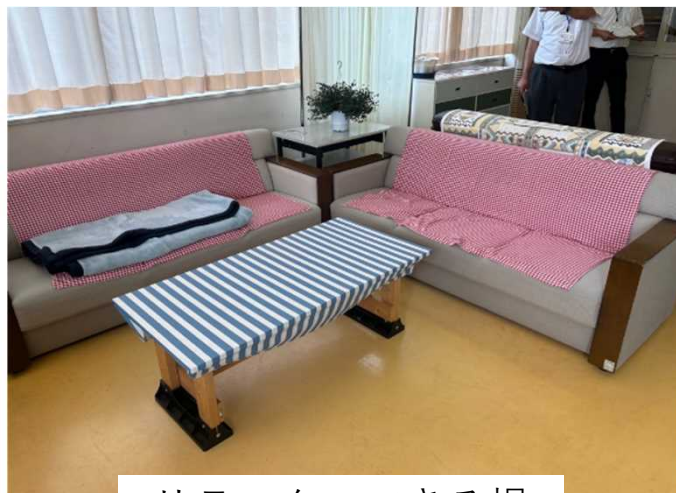
落ち着いて過ごせる場





校内フリースクールの様子②（中学校・後期課程）

世界の
あしたが
見えるまち。
TSUKUBA



リラックスできる場



個人スペース



パーソナルスペース



リラックスできる場



体験活動を取り入れる工夫



校内フリースクールの様子③



出入口の配置の工夫



掲示物・学習環境の整備



校内フリースクール 段階別支援目標

【生活編】

FSに来ることが目標。
いつ来て、いつ帰ってもよい。
FSの登校に慣れる。

1

FSに週2～3日登校することが目標。
いつ来て、いつ帰ってもよい。
FSで楽しく生活できる。

2

FSに毎日登校することが目標。
自分で決めた時間に登校し、
自分で決めた時間に下校できる。
FSで安心して生活できる。

3

FSに毎日登校することが目標。
朝から午後まで、決まった時間に
登校し、自分で決めた時間に
下校できる。
FSで規則正しく生活できる。

4

FSに毎日登校し、教室に入ることが
目標。
規則正しい生活の中で、朝の会や
給食、帰りの会など教室に入ること
ができる。
教室に入る時間を増やすことが
できる。

5

教室に毎日登校することが目標。
教室での生活の中で、辛くなった時
にFSを活用することができる。
FSでの生活を減らすことができる。

6

以降は必要に応じて
希望があれば取り組みます





校内フリースクール利用者数

◆令和5年度校内フリースクール利用者数（実人数）

小学校76人 中学校301人 **計377人**

※377人中、令和4年度に30日以上欠席していた児童生徒数143人
令和4年度に150日以上欠席していた児童生徒数41人

子どもの反応（令和5年度実施校内FS利用児童生徒アンケート結果から抜粋）

- 「信頼できる先生がいつも居てくれる。」
- 「いつでも行って大丈夫で勉強を見てくれる。」
- 「好きなことができてうれしい。」
- 「安心して登校できる。」



校内フリースクール利用者数

◆令和5年度校内フリースクール利用者数（実人数）

小学校76人 中学校301人 **計377人**

※377人中、令和4年度に30日以上欠席していた児童生徒数143人
令和4年度に150日以上欠席していた児童生徒数41人

（令和5年度長期欠席児童生徒・保護者アンケート結果から抜粋） **保護者の反応**

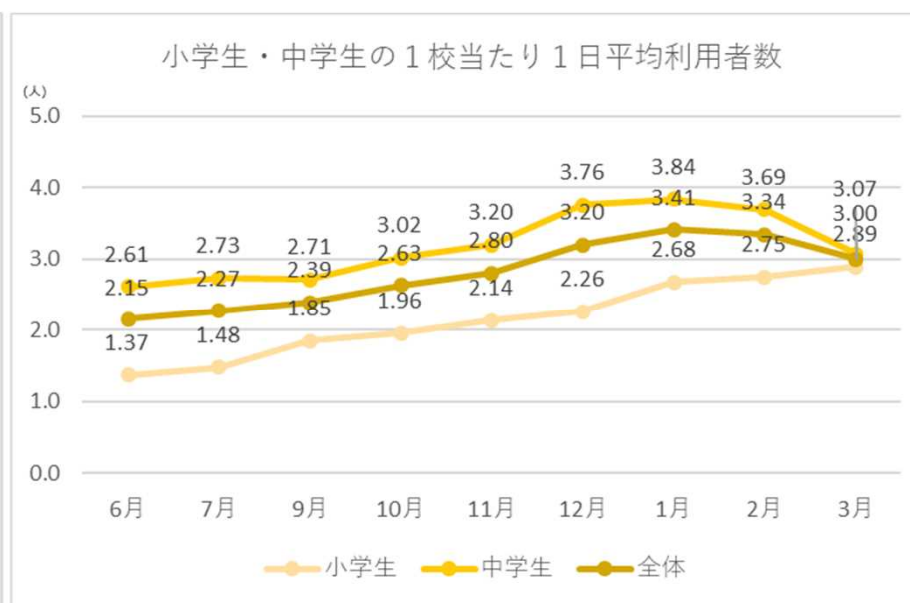
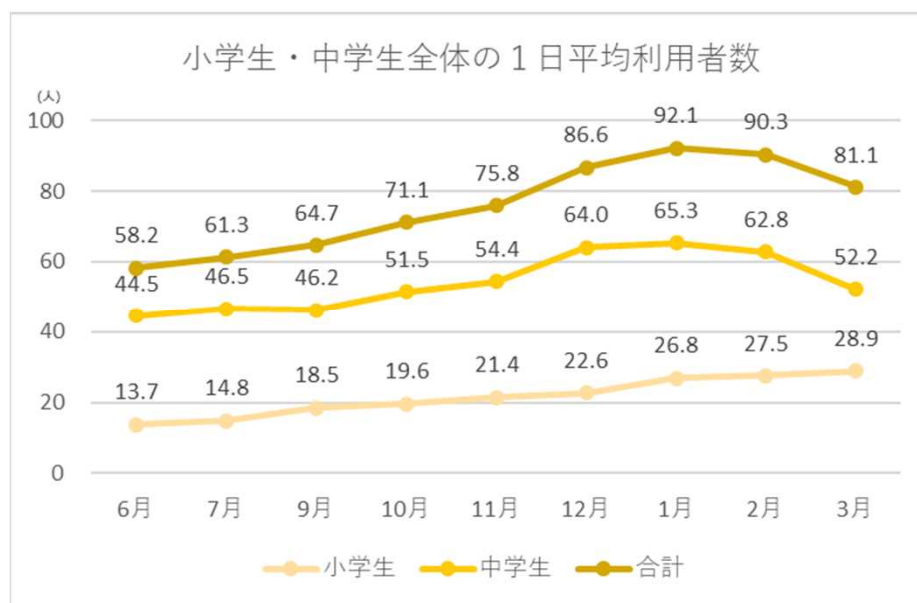
- 「本人の成長のためにも、自宅以外で安心して過ごせる場所を見つけて欲しい。」
- 「所属している学校の中にある為、自宅から近く通いやすい。学校に通う為友達や生方とすぐに会うことが出来る。学校から遠ざかってしまうことを防ぎやすい。」
- 「友達や家族以外の大人との会話などが出来る」
- 「みんなと一緒に授業を受けることを望んでいる子にとっては、重要なステップアップの場だから。」



校内フリースクール利用者数

◆令和5年度の利用者数の推移

- ・全中学校・義務教育学校後期課程（18校）、小学校6校で実施



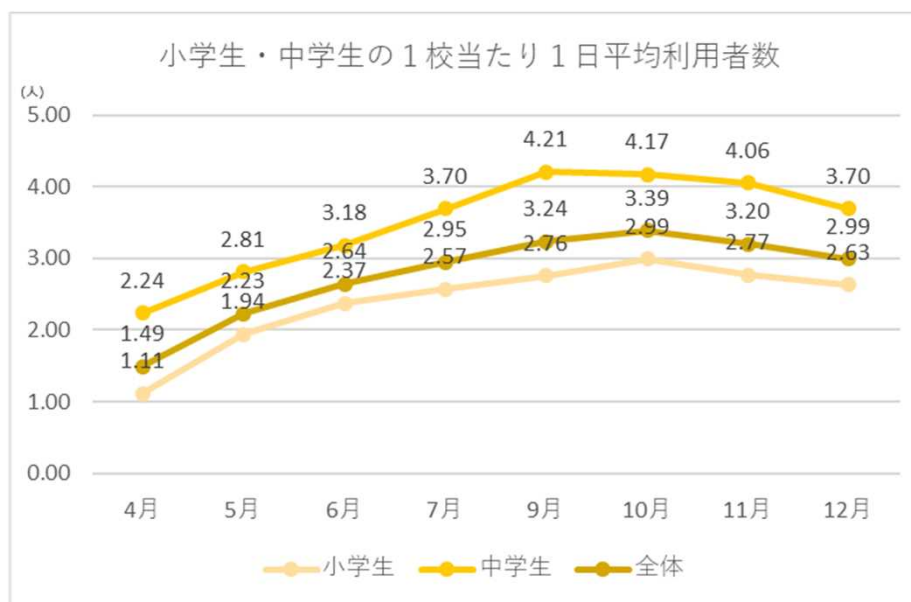
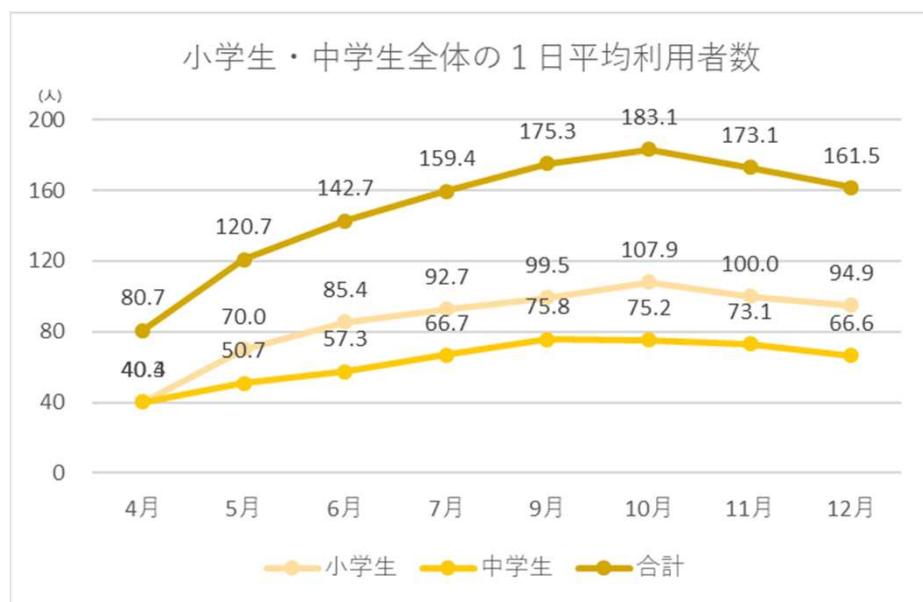
※令和5年4月、5月は、開設準備期間として数値なし。8月は、夏休みのため数値なし。



校内フリースクール利用者数

◆令和6年度の利用者数の推移

- ・全小・中・義務教育学校（50校）で実施



※8月は、夏休みのため数値なし。



学校内における支援

◆教員による教育相談

- ・不登校に関する児童生徒の支援は、学校の全教職員で対応
- ・児童生徒が、いつでも、誰でも相談できる体制を学校でつくる
 - 日頃から、教職員が児童生徒と積極的にコミュニケーションを取り、相談しやすい雰囲気をつくる
 - 教職員は、悩みや困りごとを抱えた児童生徒にタイミングよく寄り添うようにする
 - 教職員同士のコミュニケーションも重要。教職員間で協力しやすい、話しやすい雰囲気をつくる

◆スクールカウンセラー（SC）による教育相談

- ・中学校区に配置し、児童生徒や保護者からの継続的な相談に対応
- ・年々増加する相談件数に対応できるよう **SCを増員 「計（市費）」**

令和4年度 21（7）人分 → 令和5年度 34（19）人分

→ **令和6年度 46（30）人分** → **令和7年度 57（41）人分**

※1日7時間、週1日のSC活動を「1人分」と計算



学校外における支援

◆教育相談センターでの相談支援

- ・常駐する教育相談員による電話や面談による相談を実施

◆学級担任による家庭訪問・スクールソーシャルワーカー（SSW）による訪問相談

- ・状況に応じて、教員とSSWが協力し、家庭訪問や適切な機関との連携を実施
- ・より充実した支援ができるよう **SSWを増員し、中学校区に配置**

令和4年度 8人分 → **令和5年度 17人分** → **令和6年度 18人分**

※1日6時間、週1日のSSW活動を「1人分」と計算

◆公設の不登校児童生徒支援施設での通所支援

- ・市内2か所で通所施設を開設し、学校外での集団生活や学習を支援。

➤ つくしの広場 つくば市教育相談センター内に設置し、市が直営で運営

➤ ここにこ広場 市が設置し、民間事業者に運営業務を委託し運営 → **R7大穂（ひだまり広場）**



学校外における支援

- ◆ 民間の不登校児童生徒支援事業利用に係る保護者への支援
 - ・ 民間の不登校児童生徒支援事業を利用した際に支払った利用料に対し、
1か月当たり最大20,000円を助成。

- ◆ 民間の不登校児童生徒支援施設の運営者への補助
 - ・ 民間の不登校児童生徒支援施設に対し、**最大で対象経費の2分の1の額を補助**

- ◆ 保護者に対する支援
 - ・ 支援施策に関する積極的な情報提供
 - 公設支援施設、民間の不登校児童生徒支援事業利用に係る助成等の案内チラシの作成と全校配付
 - 校内フリースクールの案内チラシの作成と配付
 - 市が把握する民間の不登校児童生徒支援施一覧の作成とweb掲載



学校外における支援

◆家にいる児童生徒への支援

・オンラインでの学習支援

- 市独自のICT教材「インタラクティブスタディ」の活用
- 茨城県が配信するオンライン授業動画「いばらきオンラインスタディ」の活用



（インタラクティブスタディの画面）



不登校に関する児童生徒支援の状況

◆令和5年度に学校内外の機関等で専門的な相談・指導等を受けた実人数

令和5年度の不登校児童生徒数	809人
学校内外の機関等で専門的な相談指導等を受けた児童生徒数（実人数）	692人
学校内外の機関等で専門的な相談指導等を受けていない児童生徒数（実人数）	117人

（令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査のつくば市データ）

- ・学校内外の機関等で専門的な相談・指導等を受けていない117人の児童生徒は、教職員からの継続的な相談・指導等は受けており、全ての不登校児童生徒が、何らかの相談・指導等につながっていると言える。
- ・一方、市としては、全ての不登校児童生徒が、専門的な相談・指導等が受けられる支援体制・環境づくりに努めることを目指す。



不登校に関する児童生徒支援の状況

- ◆令和5年度のつくば市の不登校に関する児童生徒支援施策の利用状況
- ・不登校児童生徒809人中、479人がつくば市の施策を利用

つくば市の不登校に関する児童生徒支援施策	利用者数	左記のうち 不登校者数	
① 校内フリースクール	377人	187人	
② 「つくしの広場」 （市が直接運営）	28人	17人	
③ 「ここにこ広場」 （民間事業者が受託し運営）	44人	30人	
④ 民間不登校児童生徒支援事業利用者支援交付金	107人	76人	
⑤ スクールカウンセラー、教育相談員への相談	—	288人	利用者数データなし
①～⑤ 合計（延べ人数）		598人	
①～⑤ 合計（実人数）		479人	

会 議 録

会議の名称		令和 6 年度 (2024 年度) 第 6 回つくば市総合教育会議		
開催日時		令和 7 年 (2025 年) 3 月 11 日 (火) 午後 2 時 15 分から午後 4 時 15 分まで		
開催場所		つくば市役所 5 階 庁議室		
事務局 (担当課)		総務部総務課		
出席者	委員	五十嵐市長、森田教育長、柳瀬教育委員、倉田教育委員、和泉教育委員、坂口教育委員		
	事務局	《総務部》塚本部長、沼尻次長 《総務課》高野課長、木口課長補佐、稲辺係長、南塚主任 《教育局》吉沼局長、久保田次長、中根統括監、青木企画監 《教育総務課》山岡課長、飯村課長補佐、武田係長 《学び推進課》岡野参事、宮内指導主事、市原指導主事、相田指導主事 《教育施設課》大口課長、矢口課長補佐、白田係長、神藤主事		
公開・非公開の別		☒ 公開 ☐ 非公開 ☐ 一部公開	傍聴者数	11 名
議題		教職員の働きやすい環境づくりについて ①教職員向けの学校リノベーション ②教職員間のコミュニケーション		
会議次第		1 開会 2 市長挨拶 3 議題 4 閉会		
< 審議内容 >				

事務局（総務課）：本日はお忙しいところ御出席いただき、誠にありがとうございます。ただいまから令和6年度第6回つくば市総合教育会議を開催します。まず初めにお願いがございます。本日、令和7年3月11日で、東日本大震災の発生から14年目となります。震災の発生時刻午後2時46分に黙とうのアナウンスが流れますので、その際には、会議を中断させていただき、1分間の黙とうの御協力をお願いいたします。

それでは改めまして今回の総合教育会議では、教職員の働きやすい環境づくりについて、2つのテーマ、教職員向けの学校イノベーション及び教員間のコミュニケーションについて意見交換を行います。なお、終了時間は午後4時15分を予定しております。会議録の作成にAI議事録を使用しておりますので、御発言の際にはマイクの使用をお願いいたします。それではここからの進行は市長をお願いいたします。

市長：今日もありがとうございます。今日は普段とかなり毛色が違うテーマで、どのように議論するのが良いか手探り感があると思っています。教職員の働きやすい環境づくりについてなので、本来は先生方を呼んで来ていただいて、冒頭で話をしてもらった方が立て付けとしては良かったと思いますが、申し訳ないですが設営の関係でお詫びします。

そもそもなぜこのテーマの話をするかについては、教育委員の皆さんにも御参加いただいた、1月上旬に行った教育局とHatch Eduと先生たちとのディスカッションで、色々なテーマに分かれて、例えば特別支援をどうするかとか、教職員のアンケートで6年目から10年目の先生のやりがい非常に低くなっているとか、併せて先生たちのコミュニケーションは課題が多く、どうしたらそういう課題を解決していけるのかなどの議論をしました。

そんな中、学校名は伏せますが、先生のやりがいや子供たちの幸福度が高く、認知能力の状況も良いような学校がいくつかあって、そこでの取組の工夫を聞いてみると、職員室でのコミュニケーションを戦略的に設計されてい

て、そこで先生たちが色々な話を日頃からできている事例の紹介があって、まずは問題意識を共有して、教育委員の皆さんだけでなく指導主事の皆さんにもどのようなコミュニケーションをしていく環境を作るのか、どういう意識をするのかということをお話し合ってもらおうと思います。ぜひ、まずは問題提起として、皆さんの経験の中で感じた、学校でのコミュニケーションの課題あるいは上手くいった取組などを話していただいた上で、我々はここで議論するのは、個別の課題解決ではなくて、制度として解決していったり教育行政として支援していくことですから、それについてどんなことができるか教育委員の皆さんに知見や感想などをいただいて、議論していければと思います。ということで、宮内先生からよろしくお願いします。

学び推進課宮内指導主事：学び推進課の宮内と申します。今市長から実体験を基にという話がありましたが、その話をさせていただきます。私は最初に講師をやっております、その時にこれまでで一番厳しかった職員室を経験しております、それはどんな職員室かと言いますと、隣の校長室から教頭と校長が怒鳴りあっている声が聞こえて、我々は外にいますけど、皆で行事黒板に聞き耳を立てて、逆に居心地は悪いですけども、他の先生方の結束は高まったということはありません。ただ、私としてはそういうのは聞きたくないし、もっと建設的な話がそこでは行われるべきだったのかと思います。

良かった話は、その後、600人～800人規模の小学校に行きましたが、職員室の中は先生が多いので、色々なところに先生がいらっしゃいます。その隣に給湯室がありまして、そこにソファが2台置いてあって、休み時間には学年問わず、色々な年代の先生方がそこに座っていて、お茶をしているんです。そこで子供の話や授業の話などを聞いてくださる場面はありました。職員室はどちらかというと自分のスキルの部分を共有する場面が多かったのですが、メンタルであったり経験則のような教科書に載っていないような自

分で育んだ部分は、別のところでのコミュニケーションのようなものがあつたのかと思います。

市長：ありがとうございます。給湯室がもしなかったら、宮内先生はその学校での生活はどのようなものだったと思いますか。

学び推進課宮内指導主事：そこにずっといた訳ではなく、色々な学年を立ち歩いていていたタイプだったので、そこで相談はできていたと思います。それが基になっているかは分かりませんが、別の自治体にいたときがありまして、ある程度年代は上の方になったところだったんですけど、その時は自分で色々な学年の先生に声をかけながら、自分が今考えていることや授業のこと、時事的な話、地域の話など、その辺の話を進める場面は自分で作っていました。そうすると、中学校だったんですけど、学年ごとに島で職員が分かれています、そこで色々なことが完結しがちでしたが、学年の島を渡り歩く人がいると、色々な情報が流れて、「〇〇先生がもっと知っている」などそういう情報が流れ始めるので、自分的にはそういうことを目的に学年を歩いていた覚えがあります。

市長：校長VS教頭について、そういうことがあると、皆が嫌な気分になるわけですけど、必要な相談等はそういう時どのようにしていましたか。

学び推進課宮内指導主事：基本的に教頭先生が我々の盾になってくれていました。その教頭先生は我々の悩みを全て聞いてくれましたし、「本来こうあるべきじゃないか」という話も私たちに納得できる形で話してくれました。

市長：皆で教頭を応援していたんですね。それでは次の方、市原先生お願いします。

学び推進課市原指導主事：学び推進課の市原と申します。私の経験談から、人と環境ということで、まず人からいくと、私は初任が小規模な小学校で、2校目が中規模な中学校で、3校目が大規模な義務教育学校ということを経験させていただいて、その規模感によってその人の関わる先生方との関係性は

違うことを感じました。小規模はとにかく人が少ないので、一致団結するような雰囲気は職員室の中にあることを感じています。これは中規模でも同じで、中規模になると、中学校ですけれども、学年グループがある程度できる中で、なんとなく教員間の関係性は作れることを感じましたが、大規模だと人が多いので、人間関係性を深めるのはかなり難しい印象があります。同じ学校に勤めていて、その先生の名前を知らないこととか、1年間でお話することもない先生もいるなどの経験もあります。そういう意味では、大規模で多数いる先生の中にいる1人ということでの孤立を感じやすい印象がありました。ただ、その中でも厳しい人間関係は私自身は経験がなくて、ただ自身で感じているのは、若手とか中堅とかベテランという、ある程度自覚のようなものはそれぞれの先生の中にないと、先生同士の関係性を築くのは難しい部分があって、特にそのつなぎ役となるような先生は、年齢に関係なく、その人の性格とかも含めてだと思うんですけれども、必要だと思っています。あとは、学校教育の内容だけではない他愛もない会話ができるような雰囲気は、その先生自身の自覚みたいなものを頼るしかなくなってくる印象はありました。

環境の話では、私はお菓子も大事だなと思います。先ほど給湯室の話でも出たんですけれども、学年会をやるときにはお菓子とかを準備したり、ある学校では自分のお菓子を1個紹介しながら行うとか、その学校は関係性が良いんですけれども、夕方になってお話するときは糖分はもうないでしょうから、食べ物是很重要的なのだと今話を伺って思いました。

市長：実は午前中にある会をやっていたんですけど、お菓子があって、その日一番の笑顔になっていました。お菓子大事ですよ。今のお話で伺いたいんですけど、自覚というのは、その先生自身が自分からコミュニケーションをとろうとしようと思うみたいなものですか。もう少し掘り下げてもいいですか。

学び推進課市原指導主事：私が感じる教員の自覚は、その先生がどの立ち振る舞いをするべきかを考えてするものであって、例えば私は今こういう場で、ここで話をする立ち位置にいるからお話ししますが、それは、その場やその人たちの年齢層によって、その立ち振る舞いは出るべきなのか、聞いてつなぐべきなのかは常に考えて、振る舞う必要があると思っています。それはどの職場でも同じだと思いますが、教職員に関しても様々な先生方がいるので、ただ出ればいいのかとかそういうではなく、こういうことを考えられる先生が今の時代必要だと感じています。

市長：例えば先ほどの宮内先生の話でいうと、自覚的につなぎ役をやって各学年を渡り歩いてみたというのが、市原先生の言う自覚ある人みたいなことではないですか。

学び推進課市原指導主事：おっしゃる通りです。私宮内先生とは席が隣で、間に一人いるんですけれども、年齢は上ですが、その役割はここは仲良しなので、聞き役になりながら、でも反対側にいる若手主事にもつなげるようにとか意識はします。

市長：やっぱりその場所での自分の自覚があるということなんですね。例えば、職員室に30人の先生がいるとしたら、そういう役割の自覚をもって自覚的なコミュニケーションをしている先生ってどれくらいなんですか。

学び推進課市原指導主事：それを潜在的に持ってらっしゃる方はいらっしゃると思いますけど、それを表立って会話にしている方は、一桁くらいかなという感覚です。

市長：数人くらいですね。どうやったらそういう人が増えるんですか。どうやったら市原さんとか宮内さんみたいな人が増えてくるんでしょうか。

学び推進課市原指導主事：教職員は子供たちの関わりを持つ場面が多いので、教職員同士でなくても子供との関わりのなかでも大事なスキームだと思っています。子供が何かをした時にその何かをしたことに対する背景を探るとい

うのは私達もとても大事なスキームだと思っています。それが身に着けられるかどうかは、そのことに対して自覚的であるように周りの人が声をかけるということが大事なのかと思いました。その人自身はそう自覚していないかもしれませんが、他者から言われることによって、例えば「つなぎ役いいですね」「よく聞いてくれていますね」ということを言葉にして伝えるというのは、もしかしたらその人に対する人との関わりの大事な部分を伝えてくれる良いことになるのかとも思いました。

市長：ありがとうございます。フィードバックを伝えて、コーチングの世界で行動強化する範囲ですけれども、望ましいと思われる行動をしているときに、その行動をアクリッジするというプロセスが、その行動を組織内に浸透させていくなんてことがあるわけですが、まさにそういうことをどんどんやっていくと、皆が自覚的になっていく。それを見ている人が自覚的になっていくということですね。

学び推進課市原指導主事：そういう場合は、たぶん教職員間でもそのような研修はもちろんないので、そういう機会があると良いなと思いました。

市長：一方で、職員室内って、褒めたりしそうな感じがしますが、それがどのように変わっちゃうのですかね。

学び推進課市原指導主事：教職員同士のコミュニケーションでは、やはり子供に関すること、今日起こったことが多いと思います。コミュニケーションそのものについてお話しするということは、ほぼしないですね。

市長：その辺もあるといいかもしれないですね。コミュニケーションについてのコミュニケーションをすることをメタコミュニケーションと言うんですけども、メタコミュニケーションをすることでコミュニケーションが活性化することはあることですね。今先生の話ですごい大事だと思ったのは、子供との関わりにもそのコミュニケーションが出てくるということですね。相手の奥にあるものを、表面的には問いにかけて、子供の考えを引き出して、そ

いうことに全てがつながる。先生のコミュニケーションは、先生のためだけではないということですね。ありがとうございました。それでは、相田先生お願いします。

学び推進課相田指導主事：学び推進課の相田と申します。よろしくお願いします。先輩たちのお話を色々思い返しながら聞いていて、自分の経験からすると、もっと教員になりたての時は、あまり先生方に話しかけられませんでした。大学までは同じ年代のコミュニケーションという中にいて、社会人になって、周りにいるのがそれまで密に関わったことがない年代の方で、どんな会話をしたらいいのか、気軽に話しかけていいのかとか、そういったことが多くて、そんな時に後ろに大きなテーブルがあってそこでいつも新聞を読んでいる男性の40代の先輩がいたんですけれども、その方が声をかけてくれて、悩んでいることを相談できたりとか、自分からは話しかけられないけど、声をかけてもらい、こちらからも話せるようになりました。私も義務教育学校、大きな学校にいさせてもらった時に、そういった記憶があって、若い先生方とかなかなか一緒にじっくり話す機会がないので、「こうだったね」「あれは誰が準備したの」などと声をかけると、色々なことを話してくれるんですよ。どういう視点で授業を作っていたとか、どういう思いでやっていたのかが、年代に関わらず分かってきて、他の先生もおっしゃっていましたが、誰かがつぶやくとそこから話が盛り上がるが多かったです。経験とかを話ができる機会といいますか、主体的に作るのは難しいと思うんですけど、研修なんかで一部、最近あった嬉しかったことを話に入れるだけで話が盛り上がる。先生も吐き出す場所が必要だと思いました。

また環境に関しましては、学び推進訪問で色々な学校を初めて見させていただいて、授業について語れる場がある学校がありまして、自分の席だけじゃなくて、私が初任の時に新聞を読んでも先生がいたような自由なスペースがあるところで、先生たちが授業について語り合っている場面を実際に写真

で見せてもらいました。例えば、若い先生方は失敗するのが嫌だとかしっかりやっていたいなど思う方がいると思うんですけど、そういった部分も自然に言い合いながら授業に練っていける環境で、すごくいいなと感じました。

市長：ありがとうございます。授業について語り合える場ってというのは、そういう風に位置付けられて、ふらっと行ける場所なんですか。

学び推進課相田指導主事：ビッグパッドがあって、皆でつないで見せ合えることもできます。またその学校では、公開授業をするときに、「私はこういう授業を今度公開します」というのを発表していて、その順番も若い先生から言っていてすごいなと思いました。

市長：そういう場を、誰かが最初に作ろうとしたのか、プロセスはどうだったんですか。

学び推進課相田指導主事：研究主任の50代の先生が発案されました。

(東日本大震災発生14年となる3月11日における黙とうの放送)

市長：話を戻しまして、50代の先生が考えられたと。

学び推進課相田指導主事：研究主任の先生がおそらく音頭を取って最初はやっていて、そこから自然にそれぞれの先生方が動いていたようで、1回目の訪問のときは、自分だけが頑張んなきゃいけないようなプレッシャーを感じていた研究主任の先生が、9月の研究発表の時の話では、もう僕がいなくても若い先生は走りだせると、若い先生に感謝しているっていう話をしていました。

市長：なるほど。きっかけとなる人はね、先ほどの話にあった新聞を読んでいた先生で、何か意図的なやつですかね。どうなんでしょう。

学び推進課相田指導主事：振り返ってみると、自分の席にいたくなかったのかなど。自分の席だと学校の話をしなきゃいけなかったけど、そこだとゆった

り話せたりしたのかと思います。

市長：その場所がその先生にとっては大事なところになったんですかね。ありがとうございます。お待たせしました。

学び推進課岡野参事：学び推進課の岡野と申します。私もいくつか学校を回らせてもらって、大規模中学校、小規模小学校、大規模小学校、大規模中学校で、管理職のあたりでこちらに来たので、管理職の視点でお話させてもらえればと思います。昼間の職員室に先生方っていないんですよ。小学校はほぼ教室に行ってしまうので、職員室に残るのは校長と教頭、教務主任、事務員さん。中学校は唯一空き時間ある先生が職員にポロポロといるんですけども、私は教頭職だったので、教頭職は教職員のことを見守る仕事かなと思ってやっていました。今、働き方改革など色々ありますけれども先生方のメンタル的な部分もしっかりサポートしないと、すぐお休みに入ってしまう場合もある。そうすると学校全体が当然回らなくなってしまう悪循環になってしまうので、まずは、自分からコミュニケーションとるように声掛けしました。中学校の勤務では、朝第一声の挨拶を学年主任クラスの先生がそういった立ち位置にいてくれたとは思いますが。ただそういった先生方も、当然お忙しいと思うんで、それ以外のときは私とかが言って、学年の先生が声かけたりしながら、一応できるだけ先生方のことは理解しようという努力をしていましたが、本当にコミュニケーション取る方法って、良い方法がなかなか見つからなくて、まずは時間がある時に、ちょっとでも対話をする事かと思うんです。単なる情報伝達だけで終わってしまうと、多分深まらないんで、ちょっとした話題でもあったときに、それで皆さんに食いついて話ができるとコミュニケーションの力も上がってくるでしょう。若い子の方が喋っていて、私は逆に年配の方にどう寄り添うかを考えてたところもあります。

市長：先生たちってコミュニケーションについて学んだりする機会ってあまりないのでしょいか。

学び推進課岡野参事：実際、コミュニケーションに特化した研修だとかそれがなかなか取れてないのが現状だと思います。逆に言うと、ある程度コミュニケーションとれるだろうなと思われているようにも感じます。

市長：そういう前提ですね。

学び推進課岡野参事：ただ、子供たちに教えたいという先生たちは、そういうことが比較的得意な人が多い感じには思います。

市長：基礎知識なくて申し訳ないんですけど、教職でそういう科目とかはないんですか。

学び推進課岡野参事：私の35年以上前の話ですと、今の課程と違ってきちゃうかもしれませんが、今は大学では会話するような時間を徹底する科目もあると思うんです。昔はなかったと思いますが。

市長：一番近かろう先生は大学ではあったりしましたか。

学び推進課相田指導主事：演習的なところでアイスブレイクとかエンカウンターとかありましたけど、やっぱり現場に入って自主研修する部分が多く、それに特化したっていうことの記憶はないです。

市長：子供との関わりも特にあるわけじゃないんですね。先生ってそういうことができる前提でいきなり教室に放り込まれてるというのは、考えてみたら、すごいことが起きてますよね。子供とのコミュニケーションほど繊細で難しいものはないと思いますけれども。

色々ありがとうございます。教育委員の皆さんから、今のお話を聞いて、感じたこととか、方法論まで入らなくてもいいんですけど、先生たちに聞いてみたいことなど、自由にコメントをしていただければと思います。どちらからでもいいです。和泉さん、いかがですか。

和泉委員：率直にお聞きしたいのはこんなにいい事例を経験してきた先生方がいるにも関わらず、アンケートの結果にも表れているように、なかなか厳しい現状と思うんですが一番の阻害要因は何だと思いますか。

市長：なぜコミュニケーションが上手く取られないのか。今の話では、学校は
大丈夫に聞こえますが、これは例外中の例外だと我々は思っています。阻害
要因をぜひ聞いてみましょう。

和泉委員：教員の働き方改革について4年ほど前から話し合ったりしていますが、なかなか改善が見られない気がしています。教育大綱にある先生方の幸
せというのは先生方も幸せにならないと、子供も保護者も地域も幸せになる
とは思えない。不登校の数を見ても、先生方の働き方がますます厳しくなっ
ているのではないか、良いコミュニケーションがなかなか成立してないの
ではないかと私の中ですごく感じています。職員室は言われてみればほとんど
入ったことがない、保護者としても入りにくい空間だったと思う中で、その
場にいらっしゃる先生たちが、そう思っているのになんでそれができないの
か、そう思うのだったらもっとやったらいいのにと、傍から見ると感じてし
まいます。例えば給湯室にもコーヒーマーカー置くとか、小さいことからで
きることがあると思いますが、そこがあまり捗っていない印象です。

学び推進課宮内指導主事：私がいた学校では給湯室とか、コーヒを飲まない
方もいらっしゃるので、飲む人だけでみんなでお金を集めて買ったりはして
いました。ただ先生方はそこに目的があって来るかというところではなく
て、基本的には教室で、授業作りをやってますし、職員室でも授業を作っ
ているんですよね。その中で、途端にコミュニケーションが生まれるって
ところがありまして、ただ先生方は、働き方改革って文脈でもどこまでが影
響してるか分かりませんが、私の経験上では、先生方は授業をやるまでに自
信がすごくないんですよね。どうやったらいいだろうとか、失敗したくない
とか、あの子たちに何とか分かってもらいたいというのがやはりすごく強い
ので、色々準備をするんです。そうすると本当に準備の時間はあっという間
に過ぎますし、私はもう部活が終わった後に授業の準備を始めて、そのあと
生徒指導関係をする、本当に20時～22時ぐらいになってしまうような経験

も何度もありました。本当に変えたいのは分かっているんだけど、明日の授業を考えると、しっかりそこを自分の責任感といいますか、責任感と併せてその自分の自信のない部分を準備でカバーしようとする姿というのは、あるのかと思います。逆にスパッと切って帰れるかって言われると、ある程度経験年数が上がってきますと、どんな流れで授業するかはある程度分かってきますので、その時の子供たちの様子によって対応できるんですけども、その経験が少ない若い先生にとっては、この授業はどの次の授業に繋がっていてその力がどの教科に繋がっていてっていうところまでの横の繋がりがはっきり見えてこない部分があるので、その自信を何とか形にするために残るのはあるのかなという、一つの考えです。コミュニケーションが盛り上がっているところは、何かしら興味を持ってもらっている先生が真ん中にはいます。私がやりたいことができる先生とか、あの先生がやってることをいいなと思ったりとか、新しい情報を持っているとか、そういうところの周りには色々なコミュニケーションが行われていると思います。

和泉委員：授業の準備は先生にとって一番大事だと思うので、むしろ雑談している場合じゃないと、授業の準備をするというのは正解だと思いますが、そこまで授業準備に充てなきゃいけないのは、もしかしたらよく言われるカリキュラムオーバーロードの問題があるんじゃないのかというのが私の中での仮説だったので、その辺も先生方からお聞きできるのかなと。もしカリキュラムが多すぎるのであれば、自治体でできる範囲で時間割の編成とか、もう少し踏み込んで対応する必要があると思います。

学び推進課宮内指導主事：ありがとうございます。カリキュラムに関しては私の実感ですけれども、今でも学校で自由に使える時間はあります。特に若い先生が大変なのは、本当に初めてのタイミングで、自分のクラスしか学年になくて、周りに聞く人もいない状態です。これは大変かもしれないんですが、複数クラスがあって、同じ学年の色々なコミュニケーションがとれる仲

間であれば、ある程度その授業の進度であったり、例えば学年主任がやった授業を真似すればいいとか、そういうことを、学年に共有化することは十分やっていけて、ハードルは越えられるのかと思います。ただ量的な部分については、学習指導要領の部分の流れが非常に多いと思うんですが、そこについて何か私がこれまで経験した中で多いとか、全部終わり切れなかったことはなかったので、そこは気にしてくれる方がいて、終わっているかや、今どの辺をやっているかを、他の学年だったり、その辺とコミュニケーションをとる中で解決していく部分が非常に多いのかなと思います。そこでコミュニケーション取らなくてはいけない場面を作ってもらっているという捉え方なのかと。

和泉委員：学びの共同体という考え方があり、今回の予習する中で思い出していて、佐藤学先生が提唱している教室のあり方ですけれども、おそらく職員室も学びの共同体だと思います。先生たちの授業準備も職員室でできて、雑談もできてという空間だとすごくWinWinというか、そういう空間を作るためにはどうしたらいいのか、もう少し具体的に考えていければいいと思います。

学び推進課市原指導主事：先生方が授業の方法とか、こういうふうにしたら子供たちがこんな反応したなんていう、表面的という言い方が正しいかどうか分からないですが、子供たちの姿を語れる先生方が多い一方で、その表面的でない先生方がどうそれが良いかとか、ちょっと難しい教育観みたいなものがあるんですが、その観をもう少し話す必要はあるとは思っています。それは方法論に留まらずに、同じことをしている子供をどう見るかは、先生によって全然違っていて、その理由は、先生方が受けてきた教育も違いますし、その先生方が感じてらっしゃる子供の見方っていうのはその偏りだったりすることもあるので、その辺をお話することまでは、実はあまりなされていない現状です。どちらかというと、こうしたら子供たちがこう動いたとか、

こういう言葉かけをしたらうまくいったとかという、まさに表面というか、その子供たちの姿や行動、それをとらえて、成長することというのが多いのかと。ただ職員室の中にその観みたいところまでの文化が根付くというのはなかなか難しいところです。

市長：それはなぜなのでしょう。

学び推進課宮内指導主事：教室で先生方が集まるとそういう話になりますね。

教室の前で、例えば学年の先生方が集まって、その学年の子供たちの話題の話になると、そういう深い話というのは結構しやすいから、特に中学校で学年会議をやる中では、非常に熱を帯びた話になることはよくあるのかと思います。

市長：職員室とは何が違うんですか。

学び推進課宮内指導主事：職員室ですと学年で見ている子たちが違うということもありますし、例えば自分が困っていることを誰かに聞くと解決するというピンポイントな方法がわからないということや、逆に聞きたい人が話せるような雰囲気を持っていなかったりとかはあるかもしれません。

和泉委員：今話を聞いていて、よく考えたら、先生方が話すのは職員室だけではなくて、トイレや廊下というインフォーマルな形の偶発的な会話が実は大事だと思ったときに、あまり職員室のコミュニケーションのあり方を考える必要もないのかという気がしてきて、先生が自由気ままに新聞読んでも廊下で立ち話してもいいような学校風土を作れることがゴールだと思いました。

市長：自覚的な先生が多ければ、どこであっても話せるということになると思いますが、そういう先生はさっきの話だとマイノリティであるのも課題なのかもしれないですね。ありがとうございます。では、柳瀬委員お願いします。

柳瀬委員：私は面白い学校の経験をさせてもらって、全寮制の小さな学校で、100人ぐらいの中高だったんですね。四六時中、寮も一緒という学校で、

学校を辞めた子や辞めさせられた子、ハンディキャップを持った子など色々な子をどんぶりの中に一緒にする面白い学校。例えると大正デモクラシーの自由主義教育をやっていたような学校だったんです。今タイムスリップして、未来社会へ来て、大正デモクラシーの自由主義教育を経験した人からすると、学校ももう未来の学校なんですよ。私はこんな経験をしてしまっているので、やっぱり時代はこういう風になっているとメタ思考してしまうんですけど。私が学校にいた時に職員室の問題は、生徒を職員室に入れるか入れないかでだいぶ揉めたんです。仕事ができないから生徒を教室に入れるなという先生と、生徒と話したいという先生。決着がついたのは、職員室はコモン（common）の場所だから、子供たちが自由に入れるようにしたんですよ。なんで職員室にくるんだよって先生が言うんだけど、教室にいても喧嘩が始まるし嫌だから先生のところに来るんですよ。担任の先生や部活の先生などと喋るんですよ、休み時間に。仕事したい先生は荷物をもって教室に行って、静かにお仕事をして、また帰ってくる。そんな感じだったんですよ。非常に面白かったし、100人ぐらいの生徒だったので、先生が20人ぐらいで、その時は担任だからどうかではなくて、1人の先生は100人全部知っているんですよ。100人の生徒も先生のことをみんな知っていて、あの先生にこういうことを言ったら絶対怒るからやめておこうということも全部理解しているんですよ。田舎の昔の学校ってそうだったんだと思うんですけど、今どう変わってきているかといったときに、さっき言ったパブリックとコモンというのがあって、両方とも公共って訳されるから、同じようになってしまうんだけど、パブリックというのは誰も占有されない公の場所ですよ。コモンというのは、入会地なんですよ。田舎にあった誰でも入れて、そこで何をしても良いみんなのものだったんですよ。今公共という公園なんかもそうですけど、誰のものでもないというところで、自分のものだと思えなくなっちゃうんですけど、本当はもう一つの入会地という意味からすると

みんなのものなんです。学校もどっちかというパブリックになって、生徒も先生も居場所がないんだと思うんですよね。どんどん人数が多くなってきてしまって、何か訳がわからなくなって、すごく孤独感を感じる。それをどうやって、コモンというコミュニティ、共同体を作るかということで、これは全体的に工夫しないとできないと思うんですよね。学校でクラスターというようになったじゃないですか。人為的に分けたクラスではなくて、自然発生的に応じて集まってきた、要するにたむろするのがクラスターなんですよ。コロナでクラスターと言われるようになったんですけど、あれは菌がクラスターを作っちゃったんですよね。そういう場所が学校でどんどんできていけば良いと思うんですよね。それができれば他学年であるような、クラブや部活がそういう場所であったんでしょうけど、なかなかそのように機能しなくなってしまって。PTAはある意味クラスターっぽくて、PTAの集まりでお喋りとかが楽しいというのでデビューしたりというのもあったんですけど、そういうのもシステムチックに切り分けられてしまって。関係性が単一ですよ。先生たちの飲み会もなかなかできないことになっただろうし。それこそ会議でも開かないとなかなか皆集まってくれないんだと。お酒は出せないけど、お菓子、お茶でその場を作るとかですね、かなり自覚的だけど、意識してそういうコミュニケーションを図らないと、どんどん孤立していくと思います。もう一つオーガニックの話をしたんですけど、有機物って何でつないでいるかといったら、炭素です。炭素が色々手を引いて、酸素とか金属とか色々なものと手をつないでですよ。そのオーガニックと言ったときの炭素役がさっきおっしゃられたように必要なんだと思うんですよね。どうしてもコミュニケーションが苦手な人もいるけど、上手く引き込むようなそういうオーガニックが必要で、学校の中に有機的になって、一つじゃなくて、あちこちにあると助かるんですよ。そういう関係を作っていく必要があるのかと思いますね。それは元々人間とか民間社会が持っている力なので、

和泉さんが言われるそれを阻害するものは何ですかといったときに、時間・空間の制約。要するに職員室に入るなどと言っただけでもそれは一つ壁ができる。それから何かの会議の時にも言ったけど、「さんま」がいないってやつですよ。時間空間仲間がいないというのをどう解消していくのかというのが、大きなポイントで、未来社会においてもですけど、教育も一番大事なところもあると思いますね。授業は生徒に任せておけばいいんじゃないかと思いますね。先生が勉強して生徒が勉強しないんじゃないくて、生徒が勉強するのを手伝えればいいわけですから、生徒が変な質問をしてくれたら初めてそこから一緒に勉強すればいいんで、あまり授業の準備といって逃げないほうがいいと思いますけどね。以上です。

市長：未来の学校になってしまったので、我々大正の時のゆとりはないわけじゃないですか。その中でどうすれば、「さんま」を取り戻せたり、オーガニックなものに全体がなっていったり、そんな簡単な処方箋はないと思いますけど、あるいは答えはシンプルかもしれませんが、何をしたらいいんでしょうね。

柳瀬委員：元々は持っているはずなんです。それを邪魔しているものは、変なこだわりであったり、先生はこうでなきゃいけないとか、そういうのが邪魔しているということを自覚して、外していくことが大事じゃないでしょうか。新聞を読んでいる先生は、ボーっとしているわけではないと思うんですよ。そのソファに先生がもう、情報を持って座ってたら、気持ち悪いじゃないですか。できれば新聞だけでなく何か小説を読んだりとか、そういうことをしてくれると、表現として面白いなって子供たちが思うんじゃないですかね。先生が職員室でパソコンをいじっているのって一番カッコよくないなと思います。ICTも大事だとは思いますが。大正時代の人から見たらそれは変な光景なんです。子供と一緒にグラウンドで走りまわっている方が当たり前で、何で先生が職員室でパソコンばかりいじっているんだと

思われちゃうんですね。

市長：そういう意味では教師の無謬性からの脱却というのは、ずっとテーマとして教育大綱にも書き込んだつもりなのですが、教師も間違うとはっきり書いたんですけど、やっぱり先生たちは間違いが怖いということですよ。どうしたら先生は無謬性から解放されていくんですかね。

学び推進課市原指導主事：教師は私たちが受けてきた教育なので間違えられないということをして無意識的に感じてしまっている可能性があると思いました。ある程度の成功体験や経験を積んで、自分ができるんだという自覚を持てるようになったときに、間違ってもいいんだということを感じられるようになってきたのかと思いました。教育には正解がない、これをしたら成功だということはなかなか感じられないものでもあるので、そこには経験が必要なものです。特に若い先生方、先ほどの話題にも挙がっている5年目から10年目の先生なんかもある程度の経験を積んでいても役割が入ってくるとその役割に対しての不安を感じながら、生活をすると思います。そうすると、間違えられない思いを感じてしまうのかと思いますが、そこを抜けると、間違ってもいいんだとか、何かそういう自分の弱みを探すことができていたのかと感じているところではありますね。

市長：そういうところと前も出した虚礼が繋がっていると思っていて、すべてを完璧にしないでいい日本人像が、どんどん自分たちの首を絞めているんじゃないか。そこから先生を楽にできたらいいとは思っていて、何か壊せるものから壊していいだろうなと。ありがとうございます。それでは坂口さん、お願いします。

坂口委員：貴重なお話をありがとうございます。私自身が教育現場とは違う世界にずっといるので、職員室は非常に謎に包まれた場所で、先生方の世界というのは全然聞こえてこないんですよ。先生の知り合いはいますが、多分秘密を守らなきゃいけない部分ですとか、あんまり学校の裏側を話していけな

いのですとかそういうこともあると思うんですけど、なので全然分からないことが多いです。今、私は感動してしまして、普段子供たちから聞いている声と結構一致しているんだなと気づきました。私は普段は森の幼稚園をやっているんですけど、夏休みは自然体験活動といったサマースクールをやっていて、つくば市もしくは茨城県の色々なところから小学生、中学生が遊びに来て活動をしているので、色々な学校の様子が子供たちから聞こえるんですよね。割と楽しく行っている子たちは、先生方と、良い関係を持っていると思うんですね。先生方と楽しく遊んだ経験が、こういう風に遊んでくれた時間があつたと話してくれ、話を聞いていると多分学校全体の先生方の雰囲気も良さそうだと感じます。割と行くのが嫌だと言っている子たち、学校の不満ばかり話している子たちというのは、先生との関係もあんまり良くなかったりと、学校全体の雰囲気のこと耳に入ってくるんですよね。規模が小さいところの方が、コミュニケーションが、先生方、子供たち、他の学年、保護者との関わりも結構できているような感じがするんですよね。大規模であるほど色々な声が先ほどおっしゃったように職員室何十人もいらっしゃると、名前を知らない先生もいらっしゃるとか、子供同士もそうかもしれないですし、保護者との関係もそうですし、その関係を全体に築いていくのが、難しそうと感じてはいたので、色々な学校にいらした経験のお話を聞いて、なんだか子供が言っていることと一致しているかもしれないと感じました。前回の総合教育会議は、不登校支援、校内フリースクールの話がテーマだったと思うんですけど、私も初めてのことだったので、色々な情報で整理できなかったんですけど、そのあと考えた中で、一番の解決はコミュニケーションじゃないかと思っていました。先ほどおっしゃっていた、先生方が幸せでないと子供たちは幸せじゃないとすごい思うんですね。子供たちっていうのは、大人の背中を見て育っていると思うので、先生方が余裕がない状況は、子供たちも余裕がなくなってしまうと思っています。その中でコミュニケー

ションの部分で、色んな今の問題を突き詰めると私は社会が問題と言ってしまいうんですけど、今何ができるかを考えたときに、先生と子供のコミュニケーション、保護者とのコミュニケーション、先生同士のコミュニケーションの部分ではないかと思います。学校に対して求められてるものが時代とともに変わっていると感じていて、学びの場としての場所じゃなくて、子供の居場所。一番大きいのが多分、保護者の不安を受けとめる場としても、今は求められてきてしまっている。それは、いろんな場でのコミュニケーションの機会が減っているからなのではないかと思います。子供に関して言えば、放課後自由に子供だけで大人の目がないところで遊ぶ場が、ほとんどなくなってきていると思います。子供たちの声を聞くと自由な時間が欲しいという声しか聞こえてこないんですよ。学校がどうだったらいいか聞くと、もっと自由な時間が欲しいと言う。でもそれは、多分やらされている感とか大人に見られてる感という全体的な生活の中から出てくる声であって、単純に昼休みが増えればいいという話じゃないと思うんですよね。気持ち的に自由がないと思うのです。親も余裕がないので、家に帰った後はご飯食べて寝るだけという感じになってしまうと思うんです。地域のコミュニティ自体がなくなってきているので、昔だったら、子育ての悩みとかを、話す人もしくはおせっかいおばちゃんがいったり、おせっかいおじちゃんがいったりという中で、困っていることを解消できたものが、できない。もう一つ、私が今年度学校の役員をやったので、立ち話でお話できたんですけど、この1年過ごしていて、保護者同士の雑談をする機会とかコミュニケーションをする機会もなかったと驚いた話をしていました。新しく一年生として入った親なので、親が不安いっぱい、でも話す人がいない、不安を話す人がいない状態で、矛先は先生に言うしかないということで、多分その不安を受けとめなきゃいけない時間というのが、先生方はすごい増えてんじゃないかなと思うんですよね。保護者の対応で苦しくなっているという話をたくさん聞くので、その部分が時

代とともに大きく、その不安を解消する場がどんどんなくなっているんじゃないかなと思うんですよね。先生方もやることがいっぱい、保護者の不安を受けとめ、子供たちも自由な場がないから、学校で自由になりたいって暴れたくなっちゃうというのに頭を悩ませるというようなことになっているんだろうなと思いました。なので、多分コミュニケーションの場をそれぞれ作るということがまず大事だろうなと思いました。その中でじゃあ何がいいかと色々と話が出た中で、体系的な話じゃなくて申し訳ないんですが、結論を出すと遊ぶことが大事かなと思ってるんです。保護者の考える“遊び”はただ何もしてないだろうじゃなくて、遊ぶ時間というのは自分で考えて、自分や他者を知ることもできて、非常に大事なことだと思うんです。子供が勝手に遊ぶ時間は、関係性を築く上でなくてはならない。多分それは昔だったら当たり前のものであったから、大人はそんなの当たり前で勉強しろという気持ちになってしまおうと思うんです。だけどそこがもうなくなってる今の時代、意図的にその時間を作らないといけないんじゃないかなと思うんです。先生方から休憩スペースなどで授業以外の色々な話ができてよかったとありましたが、先生方にも遊びの時間が必要で、それが学びの時間にもなります。さらに、遊びの時間は何が良いかというと、評価されないってことが一番大きいと思うんです。さっき阻害要因で、こだわりを外した方がいいという話で、評価されている感が日本社会は多いと思うんです。保護者の方が勉強させてくださいというのは、子どもの将来が不安で、困らないようにするため、良い成績を取っていることが安心に繋がるんですけど、良い成績というのが評価される社会。先生方も先生同士で評価されている感があると思うんです。そうすると、教育大綱の中で、個性を認め、多様性を認め合う場づくりって、評価されている感があつたらできないと思うんです。間違えても良い雰囲気を作ることは、評価される考え意識があつたらできないと思います。例えば、いろんな研修はあると思うんですけども、遊

ぶ時間の研修というものがあります。いきなり先生方に自由に遊んでねというのも、なかなか難しいなと思うのですが、私も環境教育でやったことがあります、自然体験学習やってる中で、まず大人が体験しないとわからない、完全に普段の物を取り切ってオフになって、朝、若手の先生から校長先生までみんなそのまま遊んだら何か不思議なことが起こるんじゃないかなと思いました。そして例えば子供と一緒に遊ぶのも大切で、教育大綱の学校の目指す姿、子供に寄り添うという部分で、現状の壁となっている要因は、大人と子供の区別がはっきりしすぎて、人対人ではないような環境が学校の中であるんだろうなと思っているんですよね。校内フリースクールのアンケートを見ると、話を聞いてもらって嬉しかったという声が多くて、ちゃんと人として自分の話を聞いてもらえて認められた安心感だと思うんですよね。子供と大人の距離があって、人対人になる場面がない状態だと、大人が一生懸命寄り添っても、子供が入っていかないとしないんじゃないかなと思うので、これを解消するために先生と子供が遊ぶ時間っていうのがあったらいいんじゃないかなと思います。先日の話題で穴を掘るってなったんですけど、先生と一緒に掘ったらすごく楽しいと思うんですよね。そうすると一気に子供と先生の距離が近くなりますし、先生同士もそうやると、やっぱり全体の雰囲気良くなって、心地良くなる。昔はなかったかという、何か終わった後に飲み会があったですとか、60歳超えた方々の話を聞くと、よく毎日夜中までマージャンしていた話を聞いたことあるんですけど、今だと他のことに時間を割きたい、わずらわしいと思ってしまうようなことも、そこで生まれた良いことはたくさんあったと思うんですよね。今はパソコンと向き合うとか、子供も大人も個の時間が多すぎて、人として必要なコミュニケーションの時間は少なくなっていると思うので、今回のテーマのコミュニケーションはまず学校、もしかしたら職員室の配置からでもきっかけはあると思いますが、コミュニケーションについて一生懸命に先生が考える時間は、色々なことを良い

方向に持っていくと思います。

市長：ありがとうございます。

坂口委員：時代の違いによる学校に対して求められているもの差は、実際に体感としてあるかを伺いたいです。

市長：岡野さんいかがですか。

学び推進課岡野参事：私はスタートが中学校だったので、部活の顧問をやっていました。当時で言いますと、年間で300日以上部活動に取り組んで、昔は一生懸命やれば、子供たちにも伝わって、それを保護者が認めてくれたのが大きかったと思います。言い方が悪いですけど、子供に厳しい指導をしたとしても、保護者が納得すれば、それで終わることもありましてし、一生懸命さが前面に出していたような気がします。

市長：少し経つとどうですか。保護者からの要求とか学校に求められることが、今は多くなっていると思いますか。

学び推進課岡野参事：多くなっていると思います。先ほどお話があった保護者のいろんな不安な部分が学校に伝わってきていると思うんですけども、逆にそういった保護者の方々に話をする機会も随分減ってきていると思うんです。昔は保護者と会う機会が多くありましたし、普段伝えきれない話ができたり、そういう時間は昔は確保できたと思うんですが、そういった時間が削られた分、例えば学校の授業とか、行事しか来られない状況もあると思いますので、保護者が学校に来て学校の様子を見てもらう時間を作っていた方がいいのかと思います。

市長：ありがとうございます。どうですか、宮内先生。今の話を聞いて。

学び推進課宮内指導主事：実際、私が小学校の頃を振り返ると、子供会があってですね、子供会で夏にキャンプ行くにも、冬にスキーに行くにも学校の先生がバスと一緒に乗って行った覚えがあるんですね。運動会が終わった後も、うちの父親が酔っぱらってる隣で、先生も酔っぱらってる姿を見ていて

それを母親と迎えに行くことは何度もやってたので、今全くそういうのは一切ないんですよ。私も中学校が長くなったんですが、一昔前、実は倉田委員の下で私が働かせていただいた時、保護者との関係が非常に密でした。全然学年が違う保護者と学校でもいろんな話ができる関係だったんですが、時間が経つと、保護者の方と話をする機会は、本当に限られている。こちらが心配してる親の方に、こちらが寄っていかないとコミュニケーション取れない状態、向こうから来てくれることは稀なことが多くなっていると思いますね。今この行政の立場で言いますと、相談で上がってくる声を聞くと、お父さんお母さんの不安な部分を受けとめてもらうところがなくて、私が聞いて何とか頑張ってみますとなるケースが、今年去年非常に多い印象があります。それを学校は受けとめる場でもあるのは、まさにその通りで、ここまで話が上がる方はやはりそれなりに覚悟を持ってお話されているところですが、実際学校現場ではそういう方にも全部対応するとすると、コミュニケーションの取り方も、昔とは全然違うのかなと思っています。

市長：学校って教育機能と福祉機能があって、コロナのときに議論になったんですけども、どうやらリモートとかでも教育機能については補完がされていると。学校の持つ福祉機能については、明らかにコロナで完全に失ってしまったそうですね。居場所として物理的に存在しない。ということを考えたときに、今の保護者の不安が、学校が受けとめてくれない、それ本当に先生の役割なのかなとかって思っちゃうところがあって、そこまで先生に求めたら誰も先生やらないでしょうみたいなところもありますよね。この風潮がある限り先生たちはなかなか大変な状況が続いちゃいますからね。僕は学校に何かを求める発想はあまりないなとは思っていて、この認識のギャップが大きいなと感じました。ありがとうございます。倉田委員、よろしくお願いします。

倉田委員：私は小規模の小学校、中規模の中学校、大規模の中学校、大規模の

小学校を経験してきました。管理職も経験して、組織力をどう高めたらいいいのかを考えたときに、一番は仲間意識なんですよ。人間関係作りなんですよ。要するにお互いを知ることが、私は職員間で必要かなと。それぞれの個性とか立場とかいろいろある。良いところも悪いところも組み込んで交流できる、そういう人間関係作りが、組織として上手くまとまっていく気がします。私の若い頃は、とにかく何でも集団で一緒にいろんなレクリエーションもやったんです。だから、職員旅行は小学校だって2泊3日は当たり前だったんですよ。今も覚えてますけど、御年配の女の先生方は対立しやすいですよ。そういう中でもコミュニケーションを取ったりして、だからお互い知ってますよね。相手もよく分かるんです、あの人にああいう風に対応すればいいとか。そういう関係が自然と作られるんですよ。そういうのが、今はないような気がするんですよ。だから飲み会は校長に積極的にやるように言って、お互いを知ること、先ほどあった3つの間もそれで、空間と時間、仲間、私は仲間が一番優先で、その次が時間でその次、空間です。仲間ができれば、時間だって調整できるんです。空間だって工夫できるんです。そういう順位はあると思うんですね。その辺を大切にしていけることが、これからさらに望まれる、そういう意味では昔の方が私は正直良かった、昔ほど教員の仲間、その学校の方がよかったなって気がするんです。今の方が忙しくて、一人一人孤立化して、それぞれ自己中心的になってる人が多い気がするんですね。これは私のわがままかもしれないですが、何でも言えばみんな入って、皆で集まるとか、何でも話し合うとか、そういうことを中に取り込む。私の頃はレクリエーションも多い、野球とかソフトとかチームで組んでユニフォームまで作ったり、あとは学年対抗でバレーボールなど、とにかく色々な先生も巻き込んで、負けたらお菓子とかをおごるとかね。昔の方がゆとりがあったような気がするんです。学校の職員室の中でも、なんやかんやその時に子供の話とか、お互いの話をして、自分の生活、どんな人生感だっ

たのかを言って、それで私が一番大切だと今でも思っているのは、時間外での交流が、要するに飲み会ですよ。

市長：今の話を聞くと、もう明らかに昔の方が幸せだと思っちゃうわけですよ。こんなに皆、必死になって一生懸命やって真面目にやって、皆で苦しい思いをして、クレームは増えるし先生が苦しいし子供も大変だし、一体何やってんだろうと思うんですけど、一方で、令和の時代は飲み会や2泊3日の旅行だって難しいわけですよ。プライベートも大事。どうしたらいいと思いますか。

倉田委員：そういうものをやらなくてもいいですが、何か対話ができる時間をお互い意識して作るべきかと思うんですよ。だからそのためにはもう交流しなくちゃいけないんだね。私の教え子の半分は家に遊びに来たんだから、やっぱりとにかく子供たちも何でも交流ですよ。子供たちは結局基本遊びになっちゃうんですね。休みが何でも一緒に遊んでね、スキンシップする。これも私、大切だと思うんです。だから、岡野先生が言ったけど小学校なんかは、職員室には居ないんです。子供を見なくちゃいけない。もし事故や怪我だったら、教員が責任取るしかないんで、だから教室にいつもいるんです。20分ぐらい時間があつた時にだけ、職員室に皆さん来て、コーヒーとかお茶を飲んで。今はそれすらなかなかない。大変な時代な気がします。そこら辺はやっぱり、子供も含めて、何かこういう交流の場を積極的に設けるようにする。行事も含めて、学校としては、そういう企画を意識して作っていく必要はあるのかと思うんですよ。

市長：まさに遊びの部分ですよ。先生の時代は毎日遊んでたってことですよ。いい意味で。まあカリキュラムの柔軟性とかもっと踏み込まないとかなり深刻な状況にありそうだなというのは、何か認識深まってきたところで、森田さん、ここまでの話を聞いてどうですか。

森田教育長：とにかく先生方にゆとりがないことは確かだと思います。宮内先

生のお父さんの隣で酔っぱらってた1人ですから。かつて私が新採の頃は、厳しいことを言う人がいても、その隣で先生が遊んでくれてるんだからいいんじゃないですかと言ってくれる保護者がいらっしゃって、なんか救われた気がするんですけど、今坂口さんの話のように保護者の方のプレッシャーが色々あって、苦しむっていうのは結構あるんじゃないかなと思うんです。我が子にとって、狭い意味での100点満点が求められてる感覚はあるかなと思うんですね。指導主事、今ここに素晴らしい面々がいますけど、本当に学びの共同体のメンバーなってると思うんですよ。どうしてそうなってるのか考えてたんですけど、一つは志が皆同じで、学校のためになりたい、より良いつくばで、私たちが目指して作っていきたい、それを見守っている岡野課長、管理職の面々、結局ここにいる3人もそうですけどね、非常に受け入れやすい、話しやすい、安心できる、そういう感じがあるからだと思っているんです。ですから、1月6日の話し合いの時、アンケート見て思ったらコミュニケーションが豊かな今日、職員室を作る管理職はどうあるべきだろうかというのが、私が提案したテーマなんですけど、そこに結局は重きがあるのかと思っています。ですから、コミュニケーションが豊かな職員室は、倉田先生のようなやり方もあるだろうし、自分をさらけ出せるようにするのがやっぱり大事だと思うんですよ。元気が出ない先生がいる学校に行って、その先生と教頭先生や校長先生がコミュニケーションを取ってないのかというと、話はしてる。話はしてるんだけど、その先生にとってほっとできるのか、救われる話ではない。ということはやっぱりコミュニケーション、本当に大事なところにまで届いてないことなんだと思うんですね。ですから、そうになってからのコミュニケーションって余計難しいと思うので、そうならないうちに、どれだけ自分たちをさらけ出しあえるコミュニケーションが取れるようにするかが一番の課題なのかなと思うんですね。そのためには管理職の方から、いつも笑顔で、安心させる雰囲気を持って、そして自分からさら

け出すことが、大事なのかなと思って、話を聞いてました。ぜひ校長先生に、話したくなるようなことがたくさんありました。ゆとりは大事だと思うんですよね。働き方改革が、何て言うんすかね。省くことだけの改革になってるような気がして、働きがいを感じたり、自分の存在感を感じられたり、安心感があったりするのが働き方改革だと思うので、そこに行くような校長先生の働き方改革、そして保護者の方もそういう姿を認めてくれる働き方改革に、なっていきたいと思いました。

市長：おっしゃる通りです。ありがとうございます。ノスタルジーでは、今生きてはいけないので、現実的に何をするかと考えると、コミュニケーションで対話をするとか時間を作るとかで、飲み会もなかなかできないわけですけど、組織開発というものがありまして、組織開発というのは、僕はコーチとしてこういう仕事をずっとしてきてるんですけども、対話によってメタコミュニケーションを取るんですけど、フィードバックをしてどうやってみんな仕事していくとか、関係性を高めていくことによって、心理的安全性をきちんと構築をしていくと、何でも話せる関係性を日頃から作る。そうすると、いろんなことにチャレンジもしやすくなるし、みんなで認めることもできるようになっていき、結果として、幸福度が上がり、チームのパフォーマンスも上がっていくということですね。今組織開発を市役所全体では実は進めているんですけども、そういうことを学校現場に入れてくのは相当難しいとは思いますが、まさに今言ってるような要素がすべて実は入って、今日午前中の会議は組織開発の話題だったんですけど、そこに今日参加したメンバーがいますし、かなり話題の重なり感じたんじゃないかなと。自分の問いかけが教師、子供の問いかけに繋がるような、まさに組織の中でのコーチと、その職員がさらに他の職員にどう関わるか、やっぱり余白があってどういうコミュニケーションとるかとか、そういうことを考えて入ってるんですけども。教育大綱にコーチングと書いてある、そういう部分も含めてな

んですけど、そのような要素と、もう一つ感じたのは、やっぱり遊びという部分が本当にないんで、その遊びをどう実現するか、スポーツがその代替的な要素は一部分はあると思っていて、プレイをもっと増やしていくという意味では、教育の中で比較的やりやすいのかなと。ただ、もっと本当にどうしようもない遊びの時間が学校の中にあったらいいなと感じましたね。本当に何してもいいみたいな。穴掘ってもいいみたいな。そういうことをしていかないと、多分先生たちはたまらないですよ。人も増やしています、かなり一生懸命頑張って、学校現場を手厚くはしていますが、要求も増え続けるのであれば無理なので、それを何とか解決、対応していけるようにするためには、保護者側も変わらなくちゃいけないこともあるし、一方で地域コミュニティをどう強化していくか、どう発散させていくかとか、どう日頃から話せる関係を作っていくかなどを考えていく必要あると思いました。最後に一言ずつ、先生たち、今日参加してどうだったかをちょっと振り返りを聞かせていただきましょうか。

学び推進課相田指導主事：自分は評価がないということが印象に残っていて、子供も評価を気にしたり、先生もこうしなきゃいけないというものもあったりして。

市長：前の教育長門脇さんが就任した直後、先生たちに近代教育というのは、評価と選別の仕組みなんですよと言ったら、先生たちが「何だこりゃ」となったけど、今だったらその意味が、結構伝わると思う。評価と選別を繰り返して今の社会ができてきているんですけど、そこから解放されなくちゃいけないということで、それは今も続いてる話だったと。ありがとうございます。

学び推進課市原指導主事：お話いただいている時間とか余白とか、学習指導要領の内容のオーバーロードとかが、今の学校現場の中では、社会にすごく影響を受けているので、一朝一夕にはできないことを感じています。ただ、一

朝一夕にできないと言っても、このままではやはり厳しいということが現実としてあるとき、何が今できることなのかはもう少し精査できそうかなと。今日はコミュニケーションの話でしたけれども、環境の話で手立ては一つじゃなくて、小さなことをやれることから始めていきながら、少しずつ変化をしていくことが大事で、私は教員っていう立ち位置でもありながらこういう場でも仕事をさせていただいてるので、それをどう学校の現場に落としていきながら、先生方が幸せになるかを考えていかなきゃいけないと思いました。そのための具体が何かというのは本当にわかりません。いくつかの手立てはありそうなんですけど、それをやることで、今の先生方にプラスになってしまって苦しくなってしまうと、つらい思いをさせてしまうんで、その塩梅をどうしていくかを考える必要があるんだなと思いました。

市長：ぜひ何か行動に繋がってほしいと思います。ありがとうございます。

学び推進課宮内指導主事：今日お話を聞いていて、最後倉田先生がおっしゃった、仲間という言葉が最後にすごく響いてきて、職員関係が同僚とかそういう言葉に、これまで自分が置き換えてきた部分が仲間というのを感じました。その仲間を作るには、お友達とは違うわけで、同じ方向を向いて目的を達成するためにやる仲間ととらえると、学校に置き換えたときに、学校の課題の共有をすることによって、一人でやるよりも、皆でやったほうがいいよねという、皆でやることによるメリットだったり、そこで初めて会話が、コミュニケーションが必然的に生まれてくる場合になってくると思うんですよ。そういうものに学校がなっていくとすごくいいなと考えてました。そうすると、我々が学校に関わる時に、先生方に問い掛ける姿であったりとか、逆に子供たちに先生が問い掛ける姿というところに、現場と我々のその相似形といいますか、そういった部分での重なりを我々も意識して、いろんな場面で、同じものの繋がりがあることを意識しながら、関わっていくことが大

事なんだと考えさせられました。どうもありがとうございました。

学び推進課岡野参事：やはり何とんでも私は人間関係作りが一番大切と改めて感じさせてもらいました。さっき三つの間もそうですけども、やはり教師は子供、同僚、保護者と関係づくりをしていくしかないかなと思います。ただその一手をどう打ってあげるかを考えていくのが管理職の仕事なのかと感じています。またこういった機会がありましたらいろいろ議論できるとありがたいと思います。

市長：冒頭でお話した通り、別に結論は出さないですし、ただ、それぞれでやれることがありそうな気はしてますし、議事録が全部まとまったら、全部生成A Iに読ませて、対策は考えてもらおうと思うんですが。まじめな話、どんなことができるか、それでまた皆さんに共有したいと思いますけれども、深刻ですよ。ただ、深刻にとらえ過ぎて身動き取れなくてもしょうがないですし、昔の良さを思い出しながら、前に向かって進んでいくためにこれからも考えていきたい。ぜひよろしくをお願いします。

事務局（総務課）：以上をもちまして、本日の会議は終了となります。なお今年度の総合教育会議は、本日で最終となります。皆様、1年間ありがとうございました。

令和6年度(2024年度)第6回つくば市総合教育会議次第

日時：令和7年(2025年)3月11日(火)

午後2時15分から午後4時15分まで

場所：本庁舎5階 庁議室

1 開会

2 議題

教職員の働きやすい環境づくりについて

①教職員向けの学校リノベーション

②教職員間のコミュニケーション

3 閉会

事務局：総務部総務課

教育局教育総務課

つくば市総合教育会議 構成員名簿

職 名	氏 名
市 長	五十嵐 立青
教 育 長	森田 充
教育委員会委員	柳瀬 敬
教育委員会委員	倉田 廣之
教育委員会委員	和泉 なおこ
教育委員会委員	坂口 まり

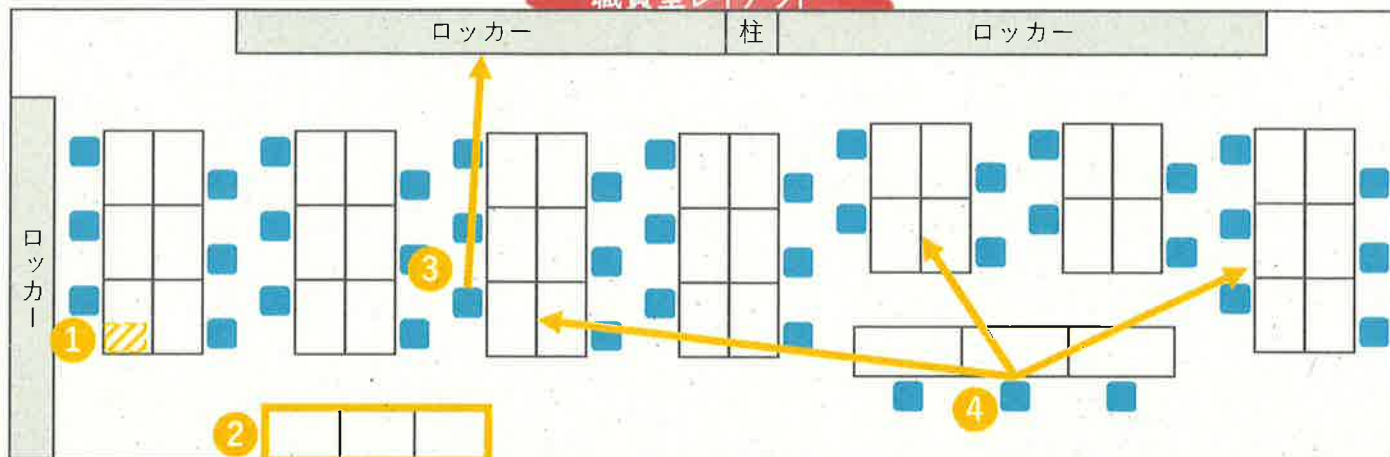
執務環境の整備

職員室のレイアウトの見直し

INTERVIEW

新設校として職員室のレイアウトを通常のものから大きく見直したという埼玉県吉川市立吉川中学校のお話を伺いました。

職員室レイアウト



1	机の下の引き出しは キャスター付きで移動できる	▶	年度途中でも席替えができる
2	個人用のワークスペースを確保	▶	集中して個人で作業する時間と同僚同士で 話す時間を分けて効率的に働くことができる
3	縦長に机を連ねるのではなく 島ごとに机を配置	▶	どの席からも壁にある ロッカーへの動線が短くなる
4	管理職の席を横長の中央に配置	▶	管理職が全体を見渡しやすい

他の学校と比べて、職員室のレイアウトで特にいいなと思う点はどのようなところですか？

- A. 多くの学校の職員室は縦にズラっと机が並んでいると思うのですが、本校では島ごとに机が配置されることで、ロッカーに物を取りに行ったりする動線が短いですし、狭い通路を何人も通ることがないので、動きやすいと思います(上記の図③)。
- A. また、管理職が一人一人と会話をしやすいように思います。ちょっと声をかけるといったことがしやすいのは有難いですね(上記の図④)。

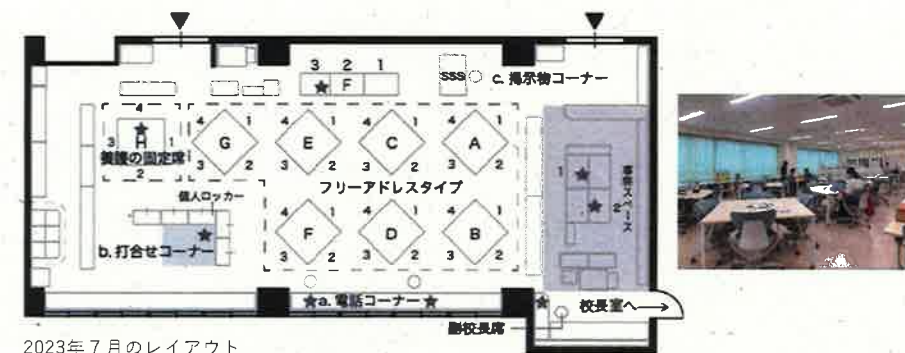
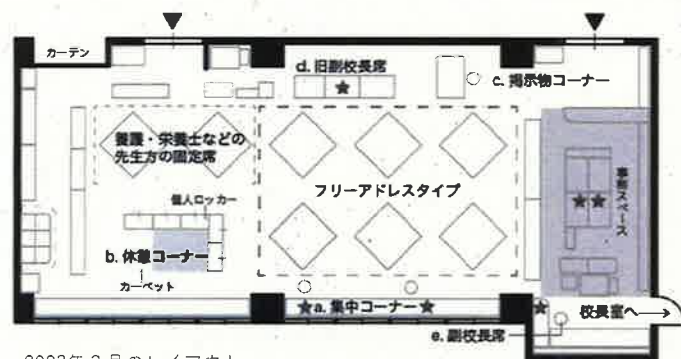
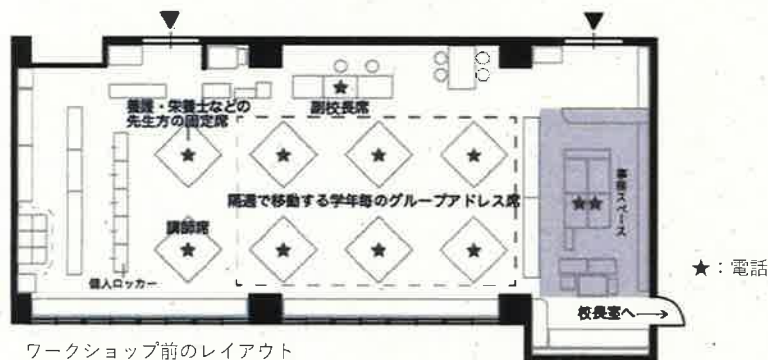
このレイアウトを今後、どのように生かしていける予定ですか？

- A. まだ教職員数が少ないので個人のワークスペースはそこまで必要になっていないのですが、今後、人が増えた際は活用していきたいと思います(上記の図②)。
- A. また、席替えがやりやすいので、進路の時期は3年生の学年団に管理職の近くに来てもらったり、年度始めは1年生の学年団に管理職の近くに来てもらったりと、時期によって席の配置を変えていくことを考えています。

※上部の図は紙面の都合上、実際のレイアウトを簡略化して記載しています。

業務の実態に合わせて職員室のレイアウトを変更

東京都板橋区立板橋第十小学校 | 将来的な狭あい化の懸念があった職員室の在り方について、研究者と教職員のワークショップを開催して検討し、フリーアドレスタイプへの模様替えや休憩スペースの設置などを行った。



教職員ワークショップの様子



ワークショップを経て職員室内にフリースペース（カーペットコーナー）を整備

実現プロセス：

当初はグループアドレスを導入も、校長からのレイアウト変更の相談

- ・校舎の改築を機に、職員室の従来の一人一台の机とワゴンによる固定席制をやめ、複人数で利用できるキャスター付きの机や、個人の所有物を保管する個人ロッカーを導入した。
- ・学年ごとにエリアを決めた上で、自分の席を自由に選択する「グループアドレス方式」を取り入れた。他の学年の教職員とのコミュニケーション活性化を目的に、学年ごとのエリアも二週間に一度ローテーションして運用をしていた。
- ・しかし、学級数の増加に伴う教職員の増加や、専門スタッフの増加に伴い、将来的な座席不足の懸念があることから、校長から大学の研究者に、職員室のレイアウト変更について相談をした。

小学校の職員室の滞在率の低さを踏まえ、限られた空間の有効活用を目指す

- ・研究者が職員室の利用状況（教職員の職員室滞在率、滞在時間）を調査すると、教職員は自分が担任する教室で業務を行うケースが多いため、普段の職員室の滞在率はとても低く、全員が揃うのは週3回の全体会議の時からということがわかった。
- ・職員室の環境づくりワークショップとして、調査結果を教職員へ共有し、職員室でやりたいことを議論した結果を踏まえ、職員室はコミュニケーションをとる場とし、周りを気にせず電話ができる場、休憩できる場を設けることになった。
- ・また、多くの教職員から相談や声かけの多い管理職や養護・栄養士などは固定席とし、それ以外の教職員については、フリーアドレスで席を利用している。
- ・その後も、利用実態に照らして一部のデスクを特定学年の固定席としたり、固定電話の場所を変更したりするなど、教職員が働く環境について自ら考えるきっかけをつくることで、教職員がより働きやすい環境づくりのために新たなレイアウトを考え、変更していく流れが生まれている。

共創-02-02 教職員との対話 教職員と研究者の対話を通じたワークスペースの改造

「教職員スペースの在り方に関する調査研究」報告書 (令和6年4月、国立教育政策研究所文教施設研究センター)

https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/r06/r0604-01_kenkyuhonbun.pdf

